

熊本県文化財調査報告第165集

頭地松本 B 遺跡 (1)

建設省川辺川ダム建設事業に伴う埋蔵文化財の調査

1997.3

熊本県教育委員会

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

とうぢまつもと 頭地松本 B 遺跡 (1)

熊本県球磨郡五木村甲字松本所在の遺跡



1997.3

熊本県教育委員会

序 文

熊本県教育委員会では、建設省川辺川ダム建設事業（頭地代替地造成）に伴い、平成5年度から代替地予定地内の埋蔵文化財の発掘調査を進めてまいりました。

ここに報告する、熊本県球磨郡五木村甲字松本所在の頭地松本B遺跡は、平成7年度から平成8年度にかけて発掘調査を実施し、平成8年度にその一部の報告書作成を行ったものであります。

この発掘調査では、中世から近世にかけての墓地が検出され、墓地を構成する遺構として「一字一石経塚」が発見されるなど、この地域の中・近世文化を考える際の貴重な資料となりました。

この報告書が広く活用され、文化財保護と研究資料の一助になれば幸いです。

なお、発掘調査に際しては、専門調査員の先生方からは多大な御指導・御助言を賜わり、感謝いたしております。また多方面で御配慮いただいた建設省九州地方建設局川辺川工事事務所、五木村教育委員会をはじめ、御協力いただいた関係各位に、心から厚くお礼を申し上げます。

平成9年3月31日

熊本県教育長 **松 尾 隆 樹**

例 言

- 1 本書は、建設省川辺川ダム建設事業（頭地代替地）に伴い、事前に実施した埋蔵文化財調査の報告書である。
- 2 発掘調査を実施した遺跡は、建設省九州地方建設局川辺川工事事務所からの委託を受けて熊本県教育庁文化課が行ったもので、当初「頭地2遺跡」「頭地松本石塔群」としていたが、字名（熊本県球磨郡五木村甲字松本）や調査の成果から統一して「頭地松本B遺跡」と改めた。
- 3 本書で報告する内容は、頭地松本B遺跡の中の墓地部分で、当初「頭地松本石塔群」としていた部分である。
- 4 発掘調査は平成7年10月から平成8年6月にかけて実施し、整理と報告書作成は平成8年11月から年度内に行った。出土遺物、調査データ等は熊本県教育庁文化課で保管している。なお、西群の五輪塔（五木村指定文化財）については、元地権者の田山種彦氏が管理されている。
- 5 発掘現場での遺構の実測・写真撮影は、各調査員で行った。遺物の実測は、主として山城敏昭があたり、一部、園村辰実の協力を得た。遺構・遺物実測図の製図は主として三宅由華があたり、遺物写真撮影は山城が行った。
- 6 写真図版の空中写真は㈱朝日航洋に委託した。
- 7 本書の執筆は、第 1 章第 1 節 1・2 は山城が執筆したものを松本健郎が校正・追記し、他は山城が行い、陶磁器の一部については大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館）より御教示を頂いた。また、挿絵は1705年頃の遺跡の様子を調査成果から想定したもので、三宅が担当した。
- 8 本書の編集は、熊本県教育庁文化課渡鹿文化財収蔵庫で行い、山城が担当した。

凡 例

- 1 遺構実測図及び遺構配置図、地形測量図は全て国土調査法第 1 種座標系を基準としている。したがって、図中に記載される方位は特に記載のないかぎり座標北（G.N）を指している。
- 2 本書に使用した地形図の一部は、建設省九州地方建設局川辺川工事事務所から提供を受けたものを基礎にしている。
- 3 遺構の深さは、断りがないものは検出面からの深さである。
- 4 現地での遺構実測は、1/10の縮尺で行い、本書収録の際には、第 5 図が1/30で、それ以外は1/20の縮尺となった。
- 5 遺物の実測は、五輪塔が1/5の縮尺で行い、それ以外は1/1で行った。本書収録の際には、五輪塔が1/10、経石が2/3、それ以外が1/2の縮尺となっている。（貨幣拓本のみ1/1）
- 6 経石の墨書表記は、墨痕跡が認められる部分は黒塗りし、筆順が確認できるものは横に白抜きで示している。

本文目次

序文

例言・凡例

第 章 調査の概要	1
第 1 節 調査に至る経緯	1
1 調査の契機と目的	1
2 予備調査と発掘調査に至る経過	1
3 発掘調査の組織	2
第 2 節 調査の方法と経過	3
第 章 遺跡の概要	6
第 1 節 遺跡の環境	6
1 地理的環境	6
2 歴史的環境	7
第 2 節 遺跡の概要	7
第 章 調査の成果	9
第 1 節 区 (墓地) の概要	9
1 墓地の立地と調査範囲	9
2 墓の配置と墓地の構成	9
第 2 節 西群の調査	9
1 西群の検出状況	9
2 五輪塔の調査	11
(1) 西 1 号塔	11
(2) 西 2 号塔	11
(3) 西 3 号塔	13
(4) 西群周辺出土の五輪塔残欠	14
3 石組墓の調査	14
(1) W 1 号墓	14
(2) W 2 号墓	15
(3) W 3 号墓	16
4 西群周辺の出土遺物	18
第 3 節 東群の調査	19
1 東群の検出状況	19
(1) E-A群の検出状況	19
(2) E-B群の検出状況	20
2 E-A群の調査	20
(1) E 1 号墓	20
(2) E 2 号墓	20
(3) E 3 号墓	22

(4) E 4号墓	24
(5) E 5号墓	24
(6) E 6号墓	26
(7) E 7号墓	27
(8) E 8号墓	29
(9) E 9号墓・E 10号墓	30
(10) E -A群周辺出土遺物	32
五輪塔残欠	32
貨幣	33
(11) 一字一石経塚（1号経塚）の調査	34
3 E -B群の調査	36
(1) E 11号墓	36
(2) E 12号墓	38
(3) E 13号墓	40
第 章 区調査のまとめ	43
第1節 墳墓の調査から	43
第2節 経塚の調査から	45
報告書抄録	
写真図版	

挿 図 目 次

第1図 開発対象地内の遺跡（参考地）	5	第18図 E 7号墓実測図	28
第2図 地形断面図	6	第19図 E 8号墓実測図	29
第3図 遺跡周辺地形図	8	第20図 E 9・E10号墓実測図	31
第4図 区地形図・遺構配置図	10	第21図 東群五輪塔実測図	33
第5図 西群平面図・立面図	12	第22図 貨幣拓本	34
第6図 西群五輪塔実測図	13	第23図 遺物実測図（染付）	34
第7図 W 1号墓実測図	15	第24図 1号経塚実測図	34
第8図 W 2号墓実測図	16	第25図 経石実測図	35
第9図 W 3号墓実測図	17	第26図 E 11号墓・出土遺物実測図	37
第10図 西群出土遺物実測図	18	第27図 E 12号墓実測図	39
第11図 E 1号墓実測図	21	第28図 E 12号墓出土遺物実測図	40
第12図 E 2号墓実測図	22	第29図 E 13号墓実測図	41
第13図 E 3号墓実測図	23	第30図 E 13号墓出土遺物実測図	42
第14図 E 4号墓実測図	24		
第15図 E 4号墓出土遺物実測図	24		
第16図 E 5号墓・出土遺物実測図	25		
第17図 E 6号墓実測図	27		

表 目 次

第1表	川辺川ダム関連埋蔵文化財一覧表	2	第3表	墳墓一覧表	44
第2表	調査進行表	4	第4表	経石一覧表	46

図 版 目 次

図版1	遺跡遠景	1	西から	2	東から
図版2	区		(北西から)		
図版3	区		(西から)		
図版4	西群	1	真上から	2	東から
図版5	西群	1	東から	2	西2・3号塔(西から)
図版6	西群	1	W1号墓(東から)	2	W2号墓(東から)
図版7	1	W3号墓(東から)	2	E9・10号墓検出状況(西から)	
図版8	東群(E9・10号墓)	1	検出状況(南から)	2	西から
図版9	東群(E1号墓)	1	地上遺構(東から)	2	地下遺構(北から)
図版10	東群(E2号墓)	1	地上遺構(東から)	2	地下遺構(西から)
図版11	東群(E3号墓)	1	地上遺構(東から)	2	地下遺構(北から)
図版12	東群(E5号墓)	1	地上遺構(南から)	2	地下遺構(北から)
図版13	東群(E6号墓)	1	地上遺構(南から)	2	地下遺構(東から)
図版14	東群(E7号墓)	1	地上遺構(南から)	2	地下遺構(北から)
図版15	東群(E8号墓)	1	地上遺構(南から)	2	地下遺構(北から)
図版16	東群	1	E4号墓(南から)	2	1号経塚(南から)
図版17	東群(E11号墓)	1	地上遺構(西から)	2	地下遺構(東から)
図版18	東群(E12号墓)	1	地上遺構(北から)	2	地下遺構(北から)
図版19	東群(E13号墓)	1	地上遺構(南から)	2	地下遺構(北から)
図版20	西群出土遺物				
図版21	東群出土遺物				
図版22	染付・鉄釘(E12)				
図版23	E12号墓出土遺物				
図版24	E13号墓出土遺物				
図版25	東群五輪塔				
図版26	東群五輪塔				
図版27	1号経塚経石				
図版28	1号経塚経石				

第 章 調査の概要

第 1 節 調査に至る経緯

1 調査の契機と目的

昭和41年（1966）、建設省が「川辺川ダム建設計画」を発表し、事前調査として、昭和54年（1979）に川辺川流域総合予備調査が行われ報告がなされている。埋蔵文化財については、熊本大学法文学部が分布調査等を行い、五木村内に17カ所の遺跡（参考地）を確認している。¹⁾

本調査は、ダム建設事業の具体化に伴い、建設省から提示された、付け替え国道、村道予定地、住宅や田畑の代替地予定地、水没予定地などの事業の実施を受けて、埋蔵文化財に影響を及ぼす地区について実施した。その目的は埋蔵文化財の破壊に係わる記録保存である。

2 予備調査と発掘調査に至る経過

熊本県文化課では、ダム建設事業の本格化に伴い、平成2年度より五木村、相良村より依頼を受け水没地及び代替地等の工事により、前述の報告を踏まえて埋蔵文化財の滅失の恐れがある地点について、現地踏査及び試掘・確認調査を開始した。その後協議を重ね、遺跡の範囲等が確定した地点については、遺跡の規模等により当該市町村と県で分担して発掘調査を実施することになった。平成9年1月現在の各地点の状況は表1のとおりである。（第1図参照）

頭地代替地予定地内については、現地踏査の時点で6カ所の遺跡（参考地）が確認された。試掘調査の結果5カ所の遺跡が確認され、基本的な調査分担方針として、大規模な遺跡は県が担当し、小規模なものについては五木村が担当することとなった。

頭地松本B遺跡は、当初は頭地2地点としていた遺跡で、平成3年度に五木村から依頼を受け、県文化課野口龍彦、松舟博満により現地踏査が行われ、「谷奥部の迫地部分の試掘調査が必要で、隣接する五木村指定文化財である『田山家墓地』の五輪塔を伴う墳墓は本調査が必要である」との報告がなされた。

これを受けて、平成5年11月、県文化課山城敏昭立ち合いのうえで、五木村教育委員会福原博信により試掘調査が行われ、迫地部分の本調査の範囲が確定した。隣接する墳墓については、村指定文化財の墳墓の周辺以外は、伐採後でないと遺跡の範囲を確定することは困難と判断し、樹木の伐採終了後に確定することになった。

平成7年11月、迫地周辺の代替地予定地内の伐採後、迫地部分の発掘調査と同時進行で墳墓群の範囲確認調査を山城が行った。その結果、墳墓群は代替地範囲外にも広がる可能性が高いことが判明し、墳墓群推定域の代替地範囲内を、迫地部分と一連の遺跡と捉えて、調査を開始し、平成8年6月に終了した。

遺物整理、報告書作成については、年度内に遺跡全体を取りまとめることはできないと判断し、本年度墳墓群部分を行い、迫地部分は次年度に行うことにした。

遺物の水洗等は調査と同時進行で五木村内で行い、遺物の接合等と報告書作成は平成8年10月下旬に熊本県文化財収蔵庫で開始した。遺跡名は、頭地代替地予定地内の試掘調査対象地点名を用いて、当初は頭地2遺跡としていたが、小字名を用いた遺跡名に整理段階で変更した。頭地代替地予定地内の同じ小字内に、もう1カ所五木村が調査予定の遺跡が所在したため、協議のうえ、五木村調査の遺跡を「頭地松本A遺跡」、本報告の遺跡を「頭地松本B遺跡」とした。

第1表 川辺川ダム関連埋蔵文化財一覧表

NO	遺跡名	本調査前仮呼称	踏査	試・確	本調査	面積	本調査分担	進行状況等	調査の原因
1	高野		H2	H2	遺跡なし	—	—	—	高野代替地
2	久領		H3	未	未	未確定	—	集落移転後調査予定	水没地
3	頭地下手		H3	未	未	未確定	—	集落移転後調査予定	水没地
4	頭地田口A	頭地1地点	H3	H4	H5~H8	約8500㎡	県文化課	平成9年1月現地調査完了	頭地代替地
5	頭地松本B	頭地2地点	H3	H5	H7~H8	約2000㎡	県文化課	平成8年4月現地調査完了	頭地代替地
		頭地松本石塔群	H3	H3	H7~H8	約1000㎡	県文化課	平成8年6月代替地内完了	頭地代替地
6	頭地田口B	頭地3地点	H3	H4	H6~H7	約5200㎡	五木村教育委員会	平成7年度完了	頭地代替地
7		頭地4地点	H3	H4	遺跡なし	—	—	—	頭地代替地
8	頭地C	頭地5地点	H3	H4	H5	約1600㎡	五木村教育委員会	報告書まで完了	頭地代替地
9	頭地松本A	頭地6地点	H6	H7	未	一部確定	五木村教育委員会	一部未試掘	頭地代替地
10		下谷	H4	H8	遺跡なし	—	—	—	下谷代替地
11	逆瀬川		H3	H3	未	約2100㎡	五木村教育委員会	—	水没地
12	野々脇		H3	H4	H4~H5	約1700㎡	五木村教育委員会	一部残、報告書まで完了	野々脇代替地
13		清楽	H4	未	未	未確定	—	置土のため試掘不可能	水没地
14		金川	H4	未	未	未確定	—	置土のため試掘不可能	水没地
15	小浜		H3	H3	H7	約1300㎡	五木村教育委員会	平成7年度現地調査完了	水没地
16		藤田	H3	H3	遺跡なし	—	—	—	水没地
17		野原	H4	未	未	未確定	相良村教育委員会	—	水没地

3 発掘調査の組織

[平成7年度 本調査]

調査主体 熊本県教育委員会

調査責任者 桑山裕好 (文化課長)

丸山秀人 (課長補佐)

調査総括 松本健郎 (主幹・文化財調査第2係長)

調査担当 山城敏昭 (文化財保護主事)

岡本勇人 (囑託・現菊陽町教育委員会)

調査事務局 白井哲哉 (教育審議員・課長補佐)

藤本和夫 (主幹・総務係長)

高濱保子 (参事)

高宮優美 (主任主事)

東 修 (主事)

[平成8年度 本調査、整理・報告書作成]

調査主体 熊本県教育委員会

調査責任者 桑山裕好 (文化課長)

	丸山秀人 (教育審議員・課長補佐)
調査総括	松本健郎 (主幹・文化財調査第2係長)
調査担当	山城敏昭 (文化財保護主事) 帆足俊文 (学芸員)
報告書作成	山城敏昭 (文化財保護主事) 三宅由華 (囑託)
調査事務局	淵上重喜 (教育審議員・課長補佐) 江尻靖子 (総務係長) 高宮優美 (参事) 東 修 (主事) 岸本誠司 (主事)
専門調査員	狭川真一 (太宰府市教育委員会) 和田好史 (人吉市教育委員会)
調査指導・助言者	大橋康二 (佐賀県立九州陶磁文化館) 松下孝幸 (土井ヶ浜人類学ミュージアム)
協力者 (順不同)	建設省九州地方建設局川辺川工事事務所 同ダム第1出張所 五木村教育委員会 美濃田光守 田山種彦 黒木求昭 土肥邦徳 土肥成文 尾方保 尾方敦敏 木野辰喜 熊本県地方課ダム対策室 東中川忠美 家田淳一 中島恒次郎 山村信榮 下川可容子 美濃口雅郎 武広正純 児玉晶子 知名石揚子 白井勝子 北岡由紀
調査作業員	中野又雄 土肥常雄 谷口松雄 羽手村三千男 田山スミエ 松本ツカサ 池田ミエ子 竹中ナミ子 石橋アイ子 尾方チユキ 川辺トミ子 森山オトメ 木下光代 田中フクエ 山口アヤ子 久保田フクノ 池田ナナエ 加藤チヨ子 土屋多恵子 犬童幾代 田山アキエ 椎葉敏美 枝川富子 桑田滝子 椎葉辰子 木下加江子 (以上現地調査) 浦田和恵 重永照代 徳永みどり 宮本幸子 吉永恵美子 上田律子 田山智子 中野千代香 内山睦子 森山信子 (以上整理作業)

第2節 調査の方法と経過

本報告は、先述したように頭地松本B遺跡の墳墓域部分 (以下「墓地」という) の報告であるので、迫地部分については、次年度報告で述べる。

現地調査は平成7年11月から平成8年6月まで実施した。表土除去、樹根の除去については、表土層の堆積が薄く、遺構が露呈している部分も見られたので、すべて手作業で行った。

表土、樹根除去後、墓地の範囲が明確になった段階で、実測図作成に用いる基準として、(有)埋蔵文化財サポートシステムに業務委託して、国土座標軸を使用するグリッド設定を行った。基本的に1辺10mで杭を設置したが、地形や露出岩石の影響で、任意の距離で設置した杭もある。

基準杭の設置後、墓地周辺の平板による地形測量を行った。遺跡全体、墓地周辺、墓地の1群と3種類の測量図を作成した。

第2節 調査の方法と経過

遺構には、墳墓と経塚があり、両者とも地上遺構の石組を検出した後、実測の基準となる十字の基準軸を設定し、10分の1の平面図を作成する。次に写真撮影を行い、断面図を作成しながら石を取り外す。そして、地下遺構の検出を十字の土層観察用のセクションベルトを残しながら行い、地下遺構が検出されたものについては、さらに平面図、断面図を作成し終了後に地下遺構を写真に収める。こうした作業を経て、調査は終了する。

また墳墓については、火葬墓、土葬墓の区別が調査途中では判断できないので、石組取り外し後の遺構検出の段階で、石組のあった範囲を4～9区画に分割して、石組除去面から10～15cmの深さまでの土と、地下遺構が検出され人骨が検出されない場合、遺構基底面から上位10cm程度の土を採取し、水洗いして骨の細片を検出することを試みた。

写真撮影は、モノクロとカラーポジの2種類で、中型カメラと小型カメラを併用して三脚を使用し、必要に応じて枠組足場を用いて行った。その撮影方向は、基本的に墳墓石組の実測の軸の方向で各々2カット撮影している。また、空中写真も必要に応じて委託して行った。

次に調査の経過を一覧で示しておこう。

第2表 調査進行表

年度	平成7年度						
月	10	11	12	1	2	3	
調査内容	伐採後の整理 範囲確定のための確認調査		西群写真撮影	西群一部石材取り外し			
	腐葉土、表土除去			東群平面実測		II区のみ調査	
	グリッド設定 地形測量		標識のない墓の確認調査				
	調査前写真撮影		樹根除去作業	南西側確認調査			
	遺構検出		地上遺構実測開始(西群)				
年度	平成8年度						
月	4	5	6	11	12	1	2
調査内容	西群石材取り外し		東群石材取り外し	出土遺物2次整理開始 関連調査		原稿執筆	
	II区のみ調査	西群下部遺構確認	東群下部遺構検出	土器類の接合、実測 一字一石経石実測		図版レイアウト	報告書発注
	東群写真撮影		東群下部遺構調査	五輪塔の実測	遺物OA登録処理	遺物写真撮影	
	東群実測		東群下部遺構写真撮影	遺構図製図	遺物図製図	写真焼付・レイアウト	

註(1) 五木村学術調査団「五木村学術調査 - 自然編 - 」1987



第 1 図 開発対象地内の遺跡 (参考地)

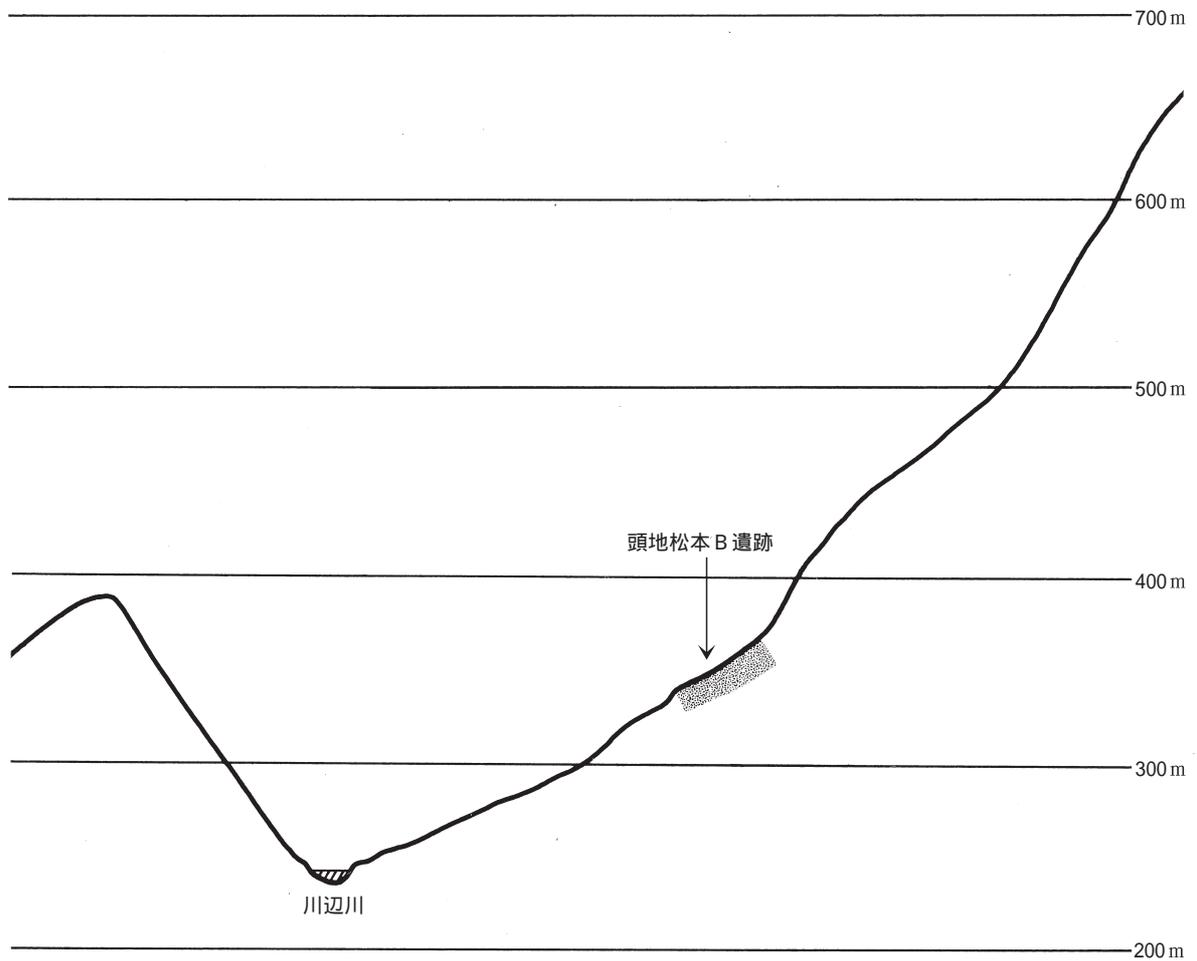
第 章 遺跡の概要

第1節 遺跡の環境

1 地理的環境 (第1・2図)

頭地松本B遺跡の所在する五木村は、標高1000mを越える山岳地帯を縫うようにながれる川辺川流域に位置し、V字形を呈する谷地形が各所に展開し、川沿や段丘上、山間の比較的平坦な部分に集落が点在している。

川辺川は、熊本県南部を流れる球磨川最大の支流で、人吉盆地を東から西へ貫流する球磨川に人吉市のやや上流で合流する。その源は八代郡泉村の宮崎県境にあり九州山地の水を集めて五木村、相良村を南流する。



第2図 地形断面図

五木村内を流れる川辺川沿岸には、河岸段丘が点在する。これらの段丘は火砕流堆積物からなり、加久藤火砕流・入戸火砕流・Aso-4火砕流を基盤とし、概ね標高300m前後に位置する。谷沿いに点在する遺跡は、このような河岸段丘と、川辺川兩岸の新しい段階の河岸段丘上の限られた平坦部に立地する傾向にある。

五木村中心部の字松本、田口、下手付近は通称「頭地」と呼ばれ、その東側に八原岳（標高1149.8m）、北側に国見山（標高1271m）、南西側に仰烏帽子山（標高1301.8m）と三方を山に囲まれ、北東側から流れ込む五木小川と南流する川辺川の合流地点の北東側に位置する。田口、下手の現在の集落は、川辺川東沿岸部の河岸段丘上にあり、頭地代替地の予定区域は、現集落の背後（東側）の河岸段丘上（以下「頭地代替地段丘」と仮称する）を中心に計画されている。

頭地代替地段丘上の平坦部は、浸食谷等から概ね6地点（松本2、田口2、下手2）に区分できる。頭地松本B遺跡は、田口の北側平坦部と松本集落の尾根上平坦部の間を浸食する谷の東奥部の迫地と、その北側の北東方向から尾根状に緩く張り出す緩傾斜面に位置し、今回報告する墓地の部分は後者に位置する。

なお、墳墓に使われている石材は、変成岩、砂岩が主で基盤となる地山や周辺部に散在しており、一字一石経塚の経石や、石組墓の一部に使用される小石の材質は様々で、科学的な分析は行っていないが、川辺川の河原で容易に入手できる。また、五輪塔の材質は阿蘇溶結凝灰岩で産地は特定できていない。

2 歴史的環境

頭地松本B遺跡の今回報告する部分からは15、16世紀から17世紀にかけての墓地が見つかったが、これまでの五木村内での分布調査や調査資料からは、中世から近世初頭の墓地は確認されていない。

墓地を構成する要素としての遺構、石塔等から周辺の状況を見てみると、五輪塔や板碑は村内数力所で確認されているが、その形態や記年銘などから18世紀以降のものが主流となる。また、検出された石組墓と同様の形態の墳墓は、周辺の墓地で「明治」年号の記年銘の墓標を確認しているの、石で方形に区画する形態が近代まで残存していたことが窺える。

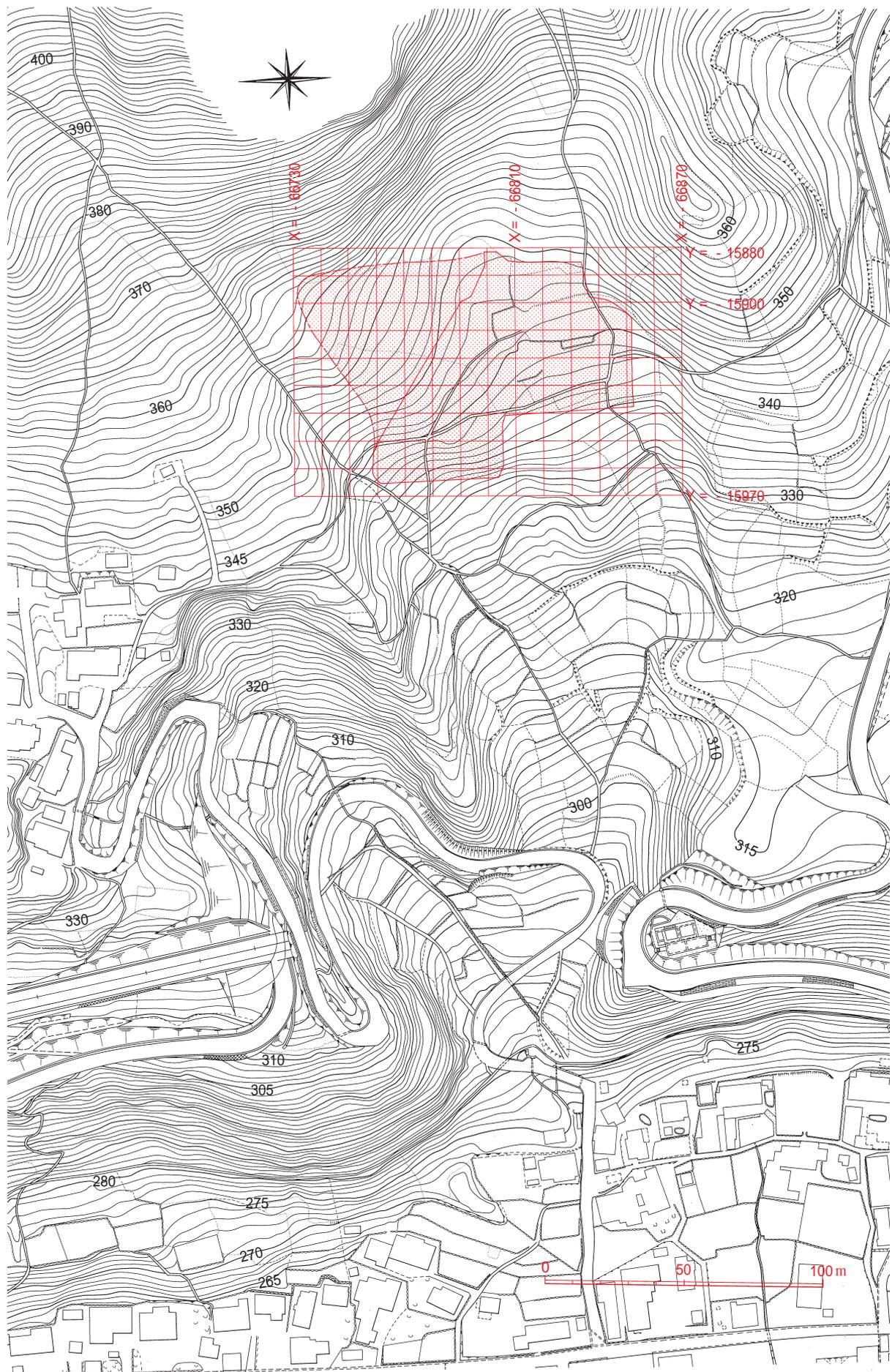
文献からは、中世後半から近世初頭の資料が現在のところ皆無で、まさに空白の時期といえる。

第2節 遺跡の概要

頭地松本B遺跡は、球磨郡五木村甲字松本に所在している。前節でも述べたように、立地する場所は、川辺川東岸の河岸段丘の浸食された谷奥部の迫地と、その北側に隣接する北東から緩く張り出す尾根状の緩傾斜面に位置し、今回報告する墓地部分の標高は調査区域内で339～345mである。次年度に同一遺跡を分けて報告するので、便宜上、今回報告する尾根線上の墓地部分を 区、次年度報告予定の迫地部分を 区と呼んで取り扱うこととする。

発掘調査は、建設省川辺川ダム建設事業（頭地代替地）に伴って平成7・8年度に実施した。 区からは建物遺構等が検出されているが、次年度報告することにして、 区の概要を示しておこう。

区からは、石組墓と呼ばれる15世紀から17世紀にかけての墳墓が検出された。その埋葬方法は火葬と土葬の2種類があり、その変遷をたどることができる。この時期の墓地の調査例は、県内では希で、今後の基礎資料となり得る。さらに、一字一石経塚が見つかったことは、県内で調査例の少ないこの遺構が、墓地を構成する要素として位置付けることができた点で大きな成果であった。



第3図 遺跡周辺地形図

第 章 調査の成果

第 1 節 区（墓地）の概要

1 墓地の立地と調査範囲（第 3・4 図）

墓地の位置する緩傾斜面は、谷奥部の迫地の北側に広がり、三角形に近い形状を呈する。最も標高の高い部分は北東側にあり、そこから南方向と南西方向に広がる。その東側は急激な斜面で、南側は迫地部分の区となり、南西側の先端部から西側は急激に傾斜して谷底となり、その谷筋は川辺川東岸の田口集落に至る。また墓地の北側は、東西先端部下の谷筋から伸びる浅い谷があり、その北側に張り出す尾根を経て、松本集落のある比較的面積の広い尾根上の平坦部に至る。

墓地全体の推定面積は最大で約5000㎡を測り、今回は西側先端部の1000㎡を調査しているので、墓地全体のおよそ1/5を調査したことになる。なお、正確な墓地全体の範囲については、開発予定区域外のため不確定な要素が多いが、建設省との協議の中で、推定区域内に別の計画が提示されているので、今後明らかになる可能性もある。

2 墓の配置と墓地の構成（第 4 図）

今回の調査で検出した石組墓は全部で16基であるが、その分布状況から大きく西群と東群に大別できる。また、地形的な要素を加えると東群はE-A群とE-B群に分けられる。

各群は、自然地形の平坦面や地山削りと盛土により造成された平坦面に分布し、南西方向から見ると、西群、E-A群、E-B群と緩斜面に設けられた離壇状の様相を呈する。調査区外については、詳細な地形は不明だが、E-B群の北東側に地形図からも肉眼観察でも確認できる平坦面があり、さらにE-A群東側の調査区外の斜面には、石組墓と思われる石材が確認できるので、墓地全体が西方から見ると離壇状の様相を呈するものと思われる。

墓地を構成する要素としては、各群に展開する「石組墓」と「石塔」（五輪塔）、東群北側の「一字一石経塚」を確認できる。墓地南に接している区北側から礎石建物を検出しているが、明確な時期や正確な現時点で把握できていないため、墓地の構成要素としての「堂」的性格の施設か否かは、次年度報告で明らかにしたい。

また、餓鬼草紙、北野天神縁起等で見られるような⁽¹⁾、墓地内で墓坑や卒塔婆等の標識を設けなくて、棺や遺体をそのまま放置したような痕跡は確認できなかった。

第 2 節 西群の調査

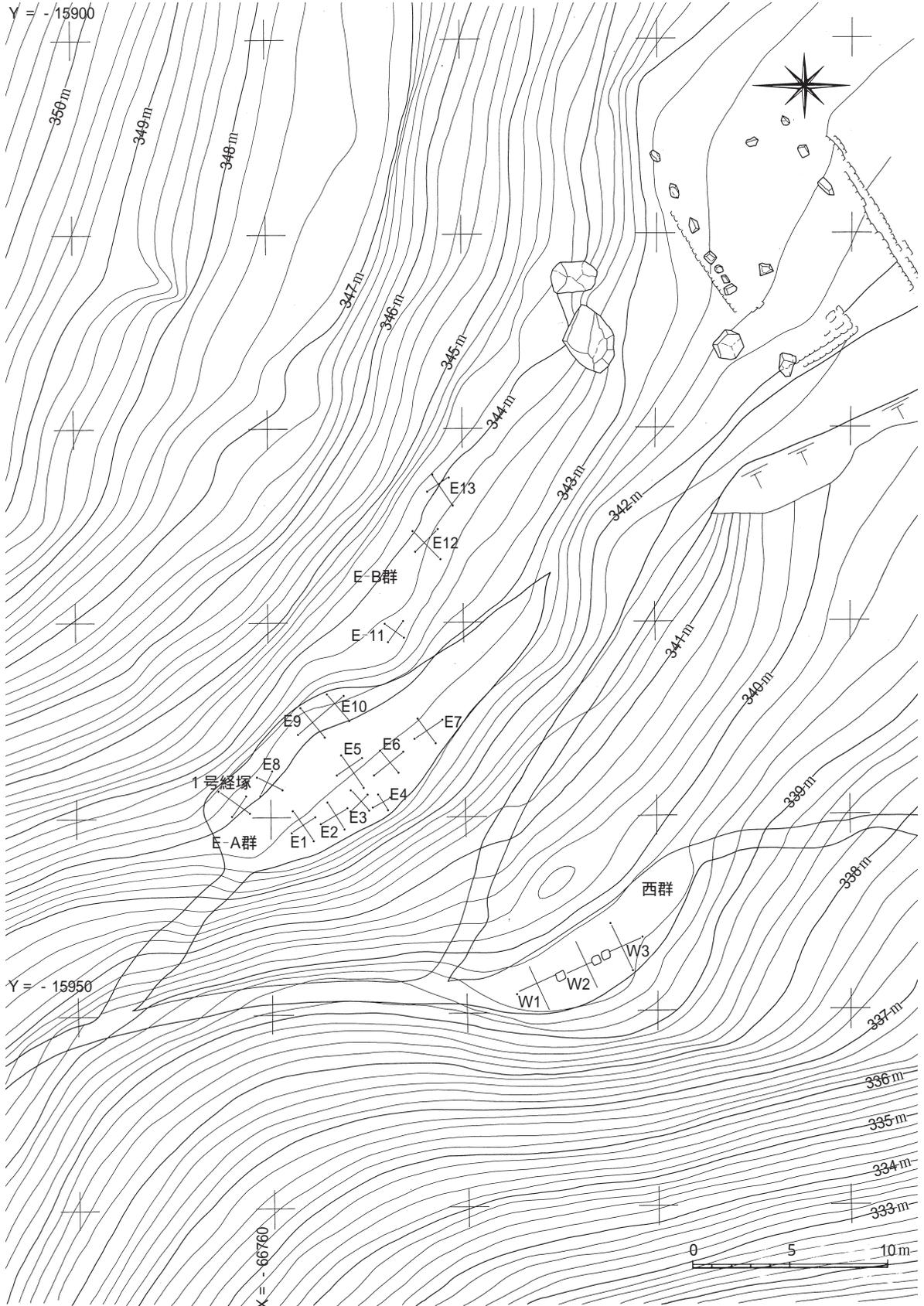
1 西群の検出状況（第 5 図）

西群は3基の石組墓と3基の五輪塔で構成され、墓地西側の最下段の平坦面に位置する。西群の西側は急激な落差の崖面となっている。この一群は、元地権者の田山家により、一族の祖先の墓として手厚く管理されており、五輪塔3基は「田山家墓地」として五木村文化財に指定され、石組墓の露出部と共に古くから周知されていた。表土の堆積は浅く、腐葉土を含めて10～20cm程の除去で全体を検出できた。

石組墓3基は主軸を同じくし、南北方向に比較的整然と配置されている。3基とも石組の周囲にほぼ正

第2節 西群の調査

方形プランの列石（以下「外周列石」と仮称する）が配置される。さらにその西側に、各々の石組に対応する形で、石組や外周列石に使用したものより一回り以上大きな石を据えている。この3基は北側からW1号墓、W2号墓、W3号墓と呼ぶことにする。全体的な石材のレベルは地形に沿っており、東側から西



第4図 区地形図・遺構配置図

側に緩やかに下がっている。

五輪塔は、W 1号墓の外周列石とW 2号墓の外周列石の間に1基（西1号塔）、W 2号墓の石組と南側の外周列石の間に1基（西2号塔）、W 3号墓の北側外周列石の一部を取り除いて1基（西3号塔）据えられている。

2 五輪塔の調査（第5・6図）

西群の五輪塔の調査は、実測図の作成と写真撮影を終えた後に取り上げて、地下遺構の確認を行ったが、墓坑などは検出されなかった。また、掘り出した土も水洗いを行ったが、火葬骨や遺物は検出されなかった。

以下、西群の各五輪塔について述べる。

(1) 西1号塔（第6図-1）

西1号塔は水輪と地輪からなり、W 1号墓の南側外周列石に接して据えられている。地輪下には2～3cmから拳大の石を10数個敷いて安定させている。

地輪周辺には15～30cm大の石が5～6個ほど配置され、簡略化した石組墓の標識の可能性も考えられるが、地下遺構、遺物、人骨は検出されていない。

水輪は、最大径の位置が、ほぼ中位にあり、上からみた平面形が、やや楕円形を呈し、長径35.0cm、短径32.8cmを測り、高さは18.5cmである。他の出土例からするとかなり扁平である。地輪は、上辺幅41.0cm、下辺幅40cm、高さ18.5cmを測る。この2つが、造立当初からのセットか否かは断定できない。両者とも風化による剥落が随所に見られる。

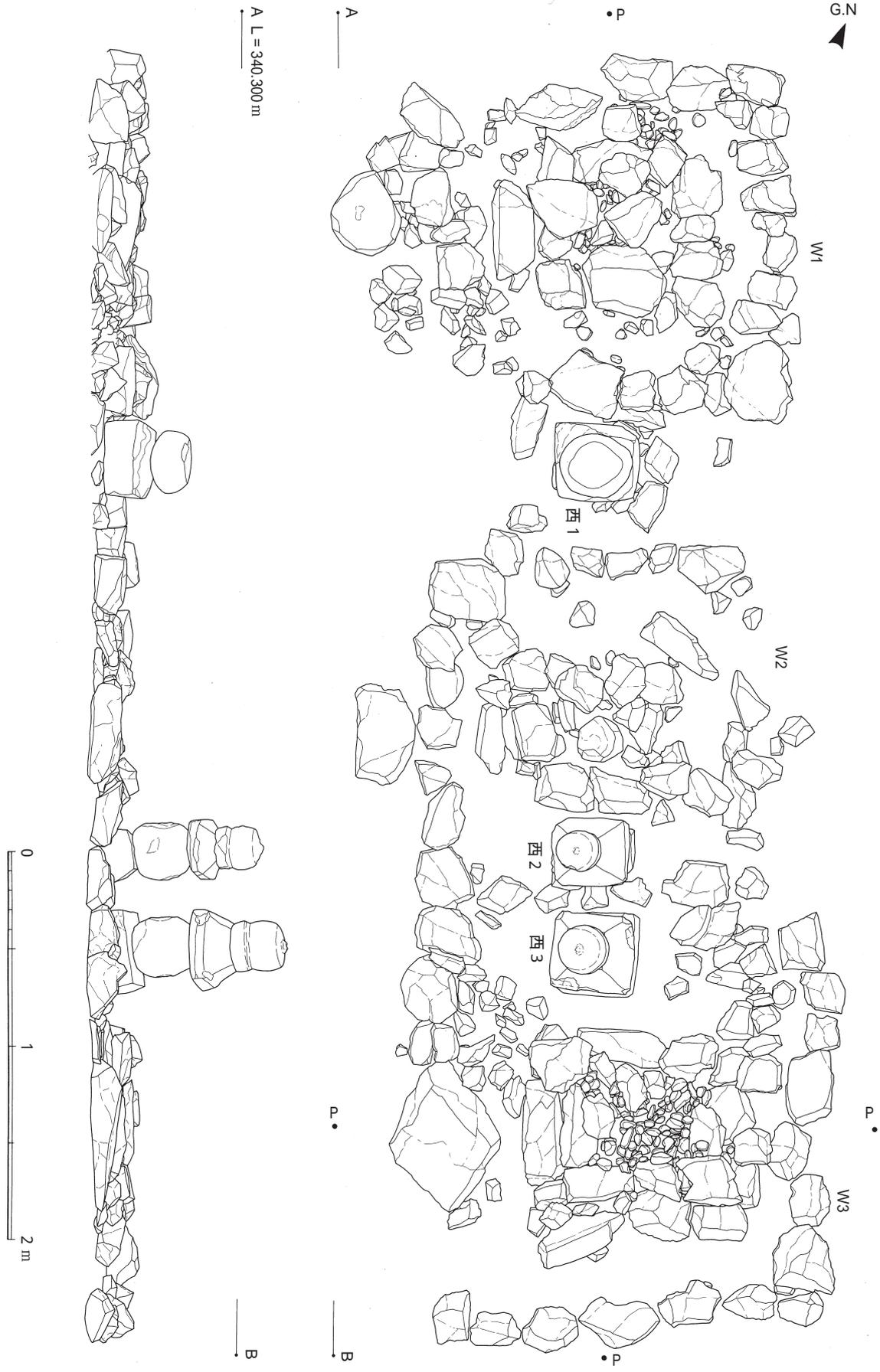
(2) 西2号塔（第6図-2）

西2号塔は、W 2号墓の石組南側と外周列石南側の間に据えられている。地輪は1/3ほど欠損しており、欠損部の境界が南外周列石に一部乗った状態である。塔は4部品ともそろっている。

空風輪は、欠損した空輪部先端から徐々に径を広げ頂点から約3cmの位置から急激に径が広がり、頂点から約6cmの位置から、空輪中位にかけて徐々に広がり最大径22.0cmを測る。そこから緩やかに径を狭めながら、風輪部との境部で最も狭まりくびれて17.7cmを測る。くびれ部から1cm下位で風輪部の最大径となり、20.6cmを測る。そこから徐々に径を狭め基底部で17.0cmとなる。基底部には火輪との接続用の突起の痕跡があり、一辺約6cmの正方形を呈すと推定される。接続部を除いた基底部からの高さは、くびれ部までで8.8cm、頂部まで推定で約25cmを測る。

火輪は、上辺11.5cmを測り、中央部に上面で6.5cm四方、基底面5.3cm四方、深さ2.2cmの接続用の孔が穿たれている。軒は中心から両側へ20cmほど水平に伸び、幅40.2cmで1.9cm上方に反り上がる。軒中央部幅は42.1cmを測り、やや胴張りとなる。上辺から軒までの稜線はやや直線的で、さほど丸みはない。基底面は25cm四方で平坦面があり、比高差3.2cmの軒中央部と、比高差4.9cmの軒隅部に緩やかに立ち上がる。軒上辺中央部の高さは10.0cm、軒隅で11.9cmを測り、上辺までの高さ13.4cmを測る。火輪を上から見た平面形は、やや胴張りの長方形を呈し、短辺の最大幅36.6cmである。高さは16.4cmを測る。

水輪の最大径は、ほぼ中位にあり、36.6cmを測る。上面は中央部がやや高く、高さ26.0cmを測り、両端は、高さ24.8cm、径25.4cmを測る。基底面はほぼ平坦で径24.2cmを測る。水輪は最大径付近での風化が激しく、上方から見ると楕円形状に見える。



第5図 西群平面図・立面図

地輪は、上面幅39.4cm、基底面幅41.2cm、高さ16.8cmを測る。

火輪以外は比較的風化が激しく、仕上げの状態が判断できないが、良好に残る部分から推定すると、丁寧に仕上げられていると思われるが、他の部材と接する面の仕上げは粗い。

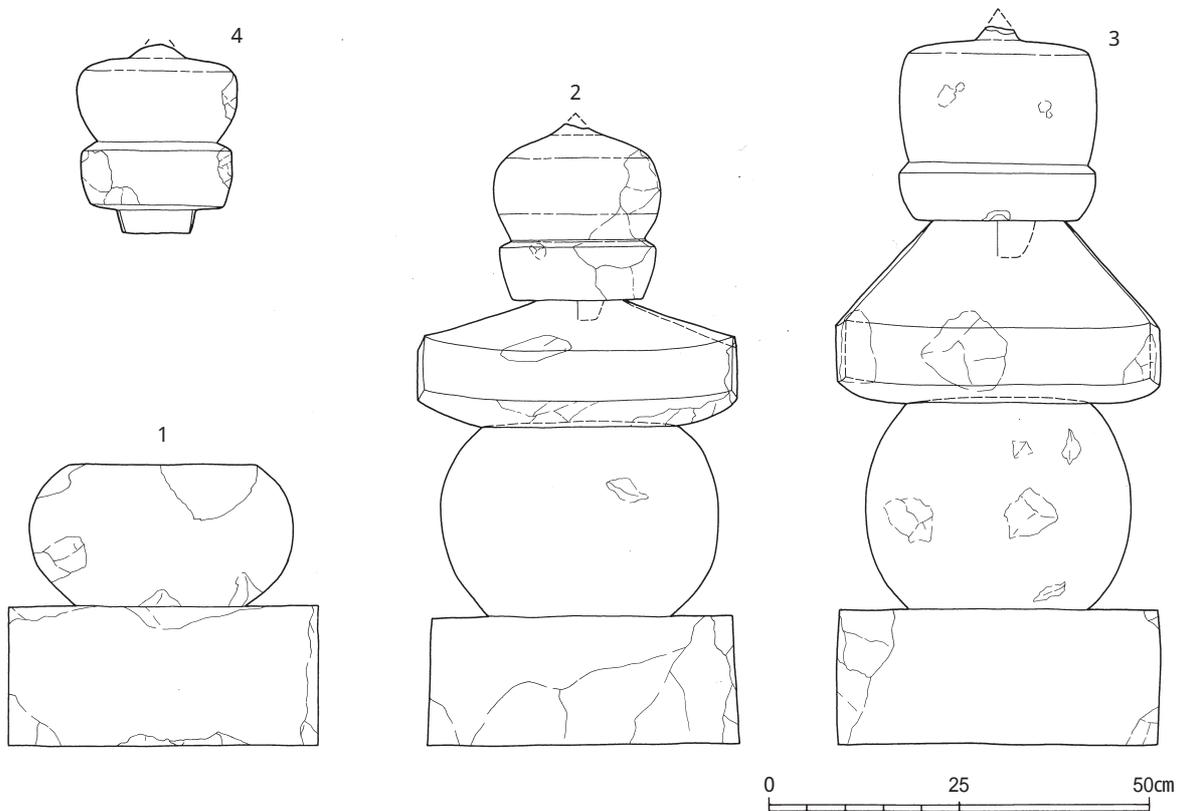
4部材がセットか否かは判断が難しいが、風輪部の下面幅と火輪上面の幅が明らかに違うことから、空風輪は別の五輪塔の部材と思われる。現状での総高は0.83mである。

(3) 西3号塔 (第6図-3)

西3号塔は、W3号墓の外周列石の北列の一部を取り除いて据えられ、西2号塔と隣接している。4部材が組み合わされており、復元総高は2号塔より、やや高く約0.97mを測る。規模では2号塔とほぼ同じだが、各部材の形状はかなり異なる。

空風輪は、欠損した頂部から下方へ推定4.2cm、径5.3cmに直線的に広がり、そこから下方へ1.8cmの箇所まで径24.0cmと一気に広がる。ここから下方4.8cm付近で最大径26.2cmを測り、緩やかに狭まりながら風輪部境の頂部から20.8cmの位置で最小径24.2cmとなる。くびれから下方0.9cmで広がり25.8cmの径となり、ここから下方6.2cmの箇所まで径19.8cmとなり、丸みを持って狭まる。この下方0.5cmの位置から付け根で径9.5cm、高さ4.2cm、先端部径5.5cmの断面円形の接続突起を造り出している。残存状態は比較的良好で、整形は丁寧である。

火輪は、上辺で幅17.0cmを測り、中央部に上面径10.1cm、基底面径5.4cm、深さ4.7cmの孔が穿たれている。軒の中央部と隅部の比高差は短く、中心から約32cmの位置から上方へ1cmほど反り上がる。隅部の幅は40cm、中央部は41.6cmを測り胴張りとなる。上辺から軒までの稜線に丸みはほとんどなく、直線的である。基底面は30cm四方の粗い仕上げの平坦面があり、軒上辺と同様に緩やかに立ち上がっている。火輪の



第6図 西群五輪塔実測図

高さは、24.1cmを測る。基底部以外の整形は丁寧である。

水輪上面は2号塔と同様中央部がやや高い。この部分で高さ28.1cm、両端で高さ27.5cm、径23.5cmを測り、最大径は中位よりわずかに下方にあり35cmを測る。基底面は平坦で、径23.6cmを測る。この水輪から比べると、2号塔のものはかなり扁平である。上面と基底面の整形は粗いが、他は丁寧に仕上げている。

地輪は上面幅42.1cm、基底面幅42.2cm、高さ18cmを測る。中位がやや膨らみ幅43cmを測る。風化が激しく整形状態はよく分からない。

2号塔と同様、空風輪と火輪の規格が異なり、空風輪は別塔の部材と思われる。

(4) 西群周辺出土の五輪塔残欠 (第6図-4)

西群北西側の急斜面の樹根除去中に表土から検出した空風輪である。調整は丁寧だが、風化による欠損が激しく、図に表れない裏側1/4ほどが失われている。空輪部は上部で最大径を測り21.0cmである。先端部の付け根部分で径7.7cm、風輪部との境界のくびれ部で径16.8cm、風輪部上部で径19.8cm、中位で20.0cm、下部で径17.6cmを測る。風輪下部からの高さは、風輪上部で7.1cm、くびれ部8.2cm、空輪部最大径の位置で16.2cm、空輪部上部稜線部で17.7cm、先端部付け根で19.4cm、欠損している先端部で推定22.7cmを測る。

また、風輪部下には接続用の突起が造り出されており、風輪部下部から下へ0.6cmの位置で、一辺9.9cmの正方形の接続部が始まり、そこから下へ3.1cmの位置で一辺8.4cmと狭まり終わる。

西群周辺からの石塔残欠の検出は、この資料のみである。

3 石組墓の調査

(1) W1号墓 (第7図)

W1号墓は西群を構成する石組墓の最も北側に位置する。東西の主軸の方向は、GN-66.5° - Eである。前述したように、外側の外周列石と外周列石西側に配置される大きめの石材（以下「西側配石」とする。）と内側の方形石組（以下「内石組」とする。）からなる。

外周列石は、10～40cm前後の石材で構成され、東側半分が比較的良好に残存し、北面西側と南面西側、西面南側の石材はほとんど失われていると思われる。規模は、東面で約1.8m、西面の復元推定で約1.8m、北面復元推定約1.95m（残存、東側0.95m）、南面復元推定約2.0m（残存、東側1.43m）を測り、概ね正方形を呈していたと推定される。

西側配石は、外周列石西面のほぼ中央に接する位置に据えられている。東西37cm、南北44cm、最大厚10cmを測り、縁に丸みを持ち、上面はほぼ全面平坦な石材である。この下から、遺構・遺物の検出はなかった。

内石組は、10～40cm前後の一辺4個程度の石材を、ほぼ正方形の外周に、面や角を揃えて据えており、東辺0.89m、西辺0.90m、北辺0.96m、南辺0.95mを測る。

石組の西側には、東西50cm、南北20cmの石材が据えられ、石組の中央部と北辺上部、西辺上部に25～30cm前後の石材がそれぞれ据えられている。石組の内側には、石材の下位レベル付近から10～20cm程度の深さまで、土に混じって5cm前後の河原石が検出されている。河原石は石組周辺の外周列石内側まで散在しており、総数は201個を数える。

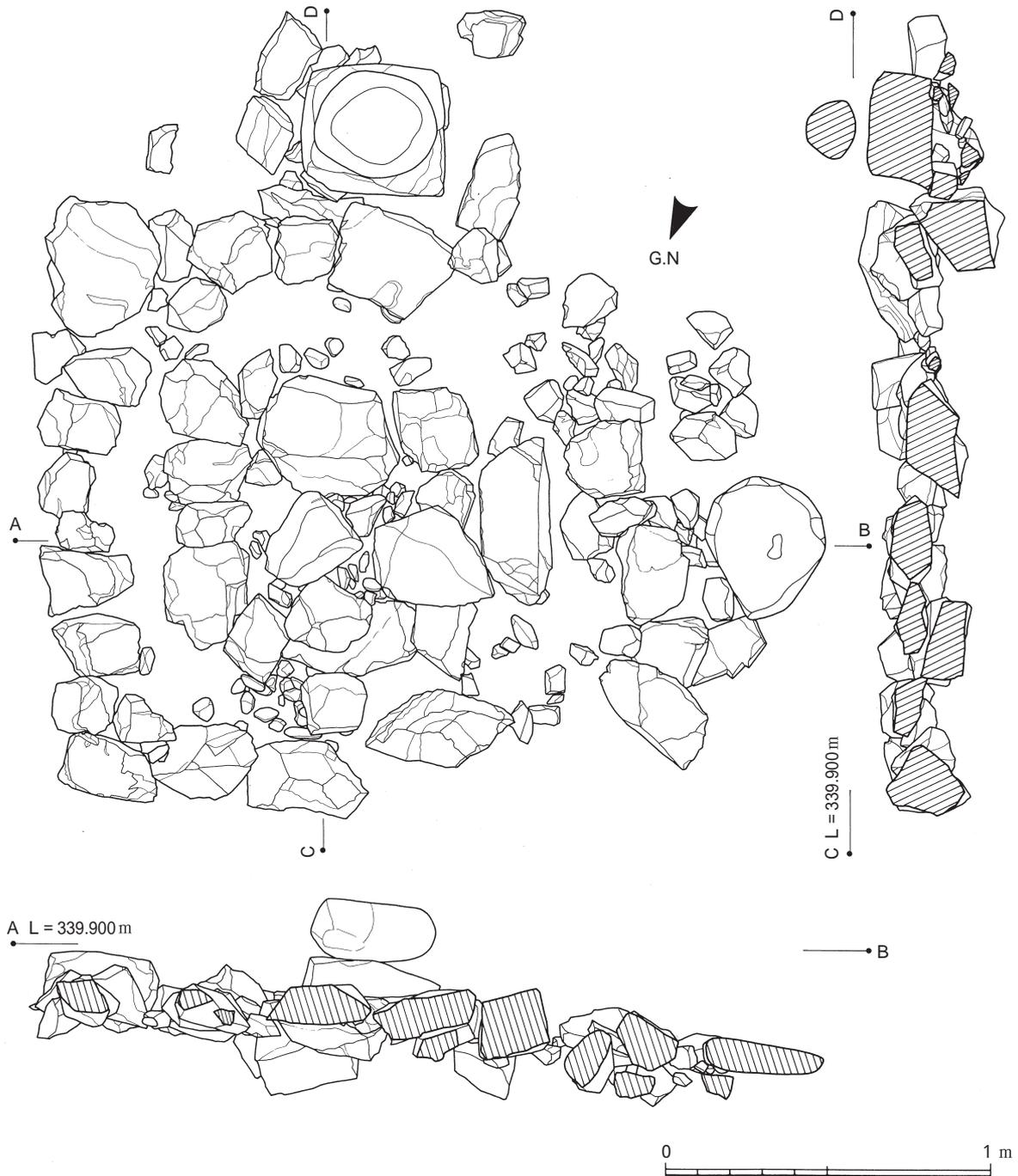
内石組及び外周列石下部には、地下遺構はなく、掘り出した土からの遺物、人骨の検出はなかった。

(2) W 2 号墓 (第 8 図)

W 2 号墓は西群を構成する石組墓 3 基中、中央に位置する。東西の主軸の方向は、GN-67° -Eである。W 1 号墓同様、外周列石と西側配石、内石組からなる。

外周列石は、10~40cm前後の石材で構成され、東面の一部の石材が失われているが、概ね良好に残る。東面で約1.8m、西面で約1.8m、北面で約1.7m、南面で約1.8mを測り、概ね正方形形状を呈している。南面はW 3 号墓北面と西 3 号塔に接している。

西側配石は、外周列石西面のほぼ中央部に接して据えられている。東西51cm、南北30cm、最大厚20.5cm



第 7 図 W 1 号墓実測図

を測り、稜線の明瞭な角張った石材で、平坦な面を上に行っている。この下から、遺構・遺物の検出はなかった。

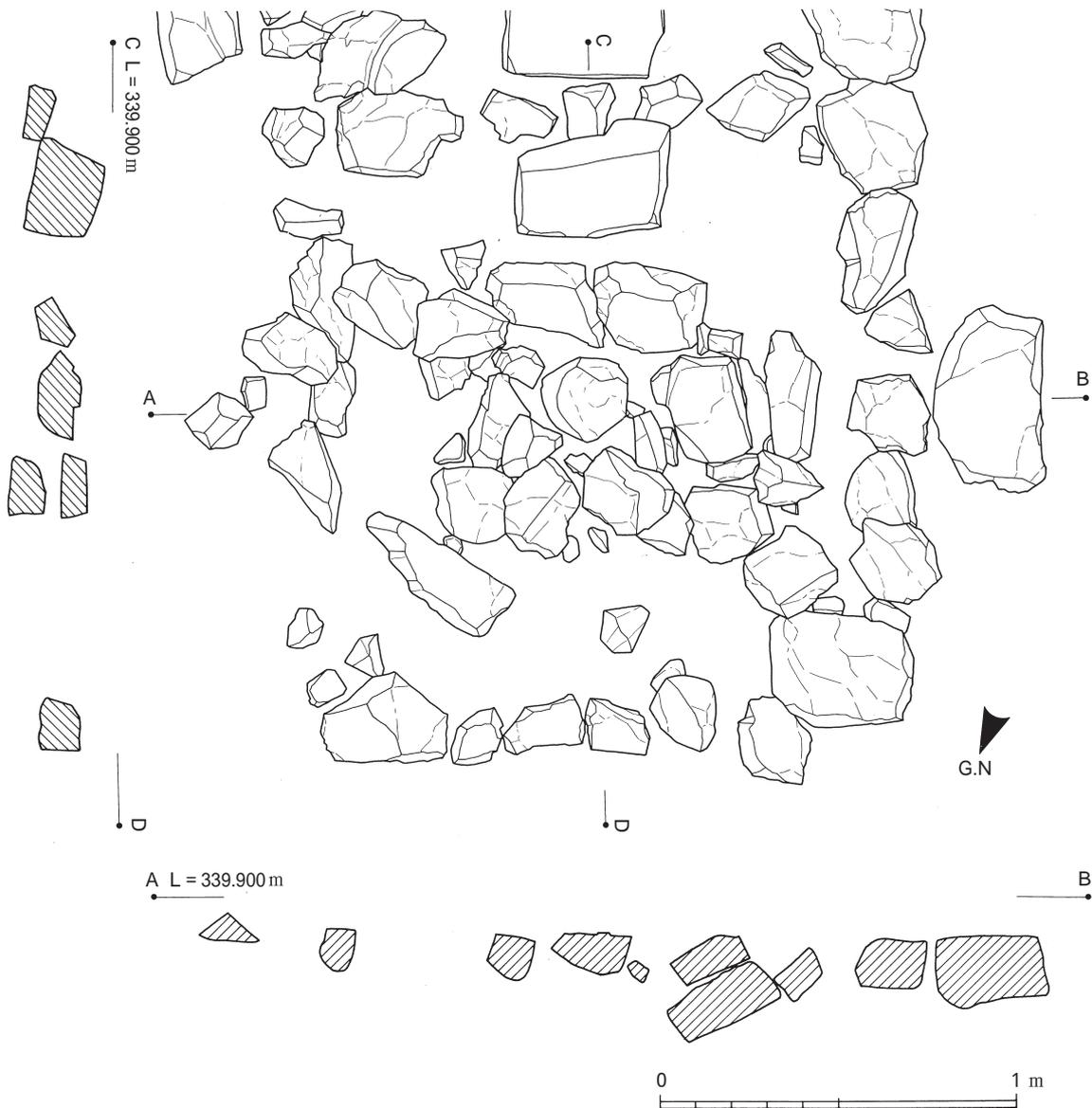
内石組は、10～40cm前後の石材を、東西約1.10m、南北約0.85mの東西方向に長い長形状に、石材の面を揃えて据えている。西面は据え方がやや雑である。石組中央部には、20cm前後の石材が1個置かれている。W1号墓や後述するW3号墓に比較すると、据え方を簡素化している。

石組の内側には石材の下位レベル付近から10～20cm程度の深さまで、土に混じって5cm前後の河原石が検出されているが、その数は西群の他2例からすると極端に少なく30個前後である。

内石組及び外周列石下部には、地下遺構はなく、掘り出した土からの遺物、人骨の検出はなかった。

(3) W3号墓 (第9図)

W3号墓は西群を構成する石組墓中、最も南側に位置する。東西の主軸の方向は、GN-67°-Eである。他の2例同様、外周列石と西側配石、内石組からなる。

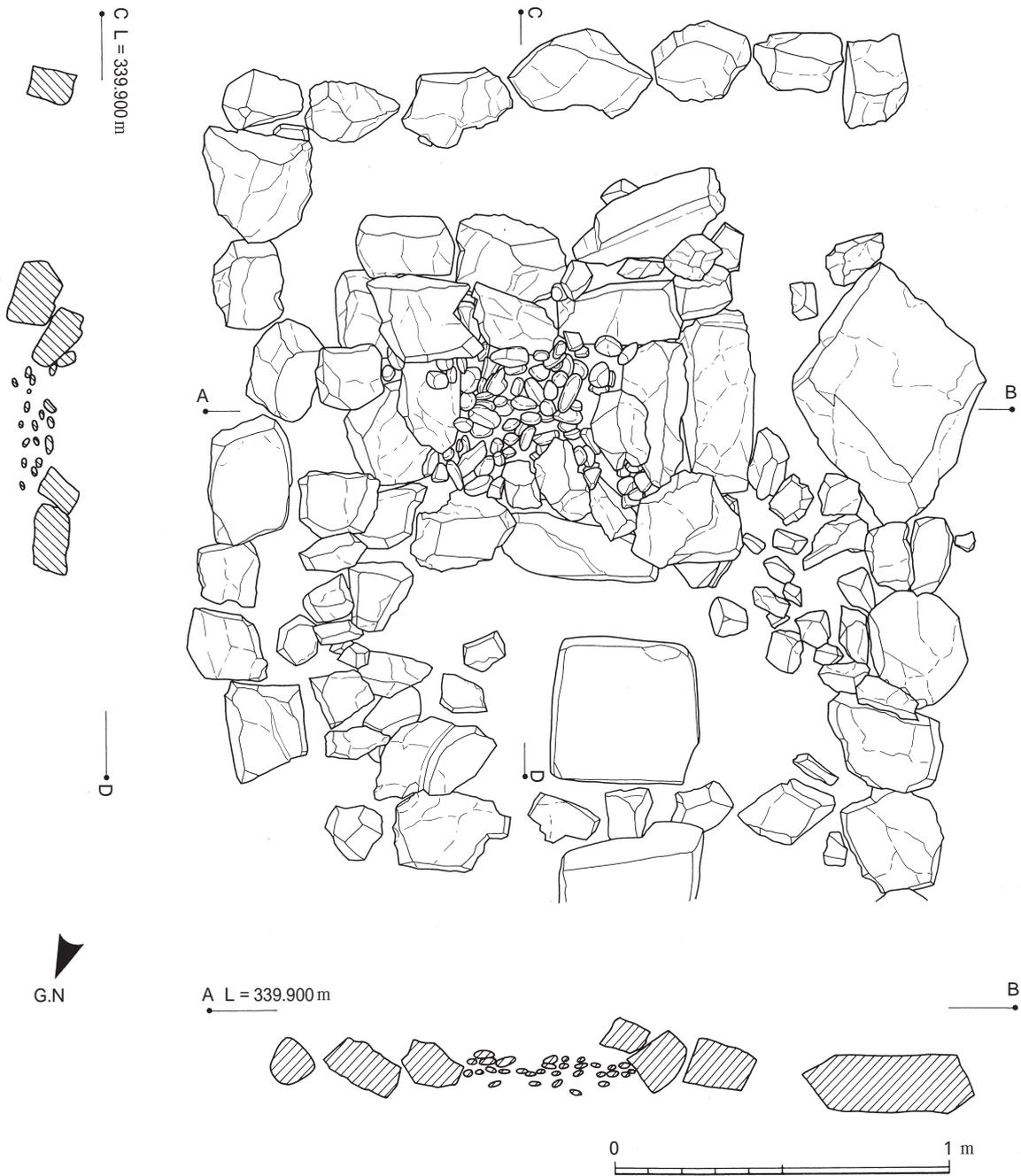


第8図 W2号墓実測図

外周列石は、10～40cm前後の石材で構成され、北面の一部の石材が、西3号塔の設置により失われているが、概ね良好に残る。規模は、東面で約2.3m、西面で約2.5m、北面で約2.1m、南面で約2.0mを測り、東西方向にやや長い長方形を呈している。北面はW2号墓南面に接している。

西群の他の2例に見られた西側配石は、同様の位置にはなく、外周列石西面のほぼ中央部に据えられて、外周列石の一部となっている。大きさは、東西80cm、南北56cm、最大厚18cmを測り、稜線の明瞭な角張った菱形の石材で、短辺を東西方向に据え、平坦な面を上に行している。この下から、遺構・遺物は検出されなかった。

内石組は、10～50cm前後の石材を、東西約1.20m、南北約1.10mの東西方向に長い長方形に、石材の



第9図 W3号墓実測図

面を揃え、角を整えて据えている。他の西群2例と比較すると、幅20cm前後、長さ40～50cmの柱状の石材が多く見受けられる。さらに、内側に、もう一周り方形に石材を据え、二重の組み方をしている。内側の規模は東西85cm、南北65cmである。

中央部は石材の中位レベルから深さ20～30cm前後まで、比較的密に河原石が置かれており、外周列石内に散在するものも含めて総数は438個を数える。

今回の調査で、最も丁寧な造りの石組墓である。

内石組及び外周列石下部には、他2例と同様に地下遺構はなく、掘り出した土からの遺物、人骨の検出はなかった。

4 西群周辺の出土遺物 (第10図・23図-1)

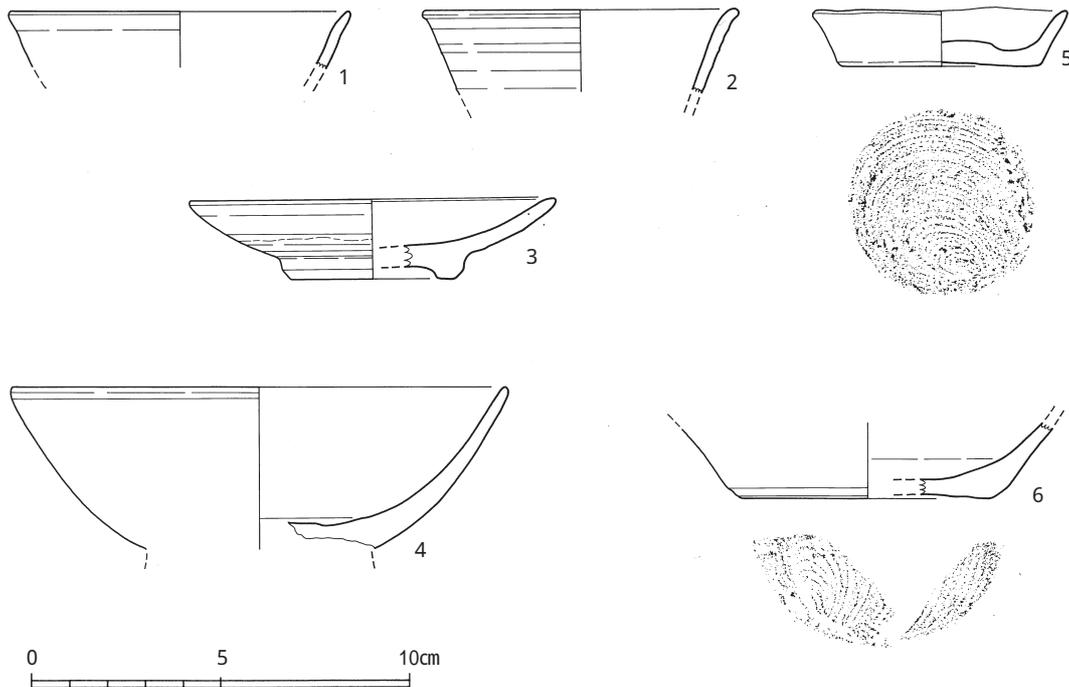
西群の墳墓から、直接時期を示す遺物の出土はないが、墳墓上の表土や周辺の表土から数点の陶磁器、土師器が検出された。図化可能な資料について掲載しておく。

(1) 陶磁器 (第10図-1・2・3・4、23図-1)

1は、白磁碗の口縁部破片である。W1号墓の中央部の河原石のやや上位の表土中から検出した。口径は復元値で9.0cmを測り、色調は施釉部分で淡黄色を、胎土は灰白色を呈す。胎土は密で黒色微砂粒が含まれ、焼成は良好である。調整は残存部ではヨコナデを施しており、内外面とも貫入が見られる。

2も白磁碗の口縁部破片である。W1号墓の東側表土から検出した。口径は復元値で8.4cmを測り、外面体部は回転ヘラケズリを口縁部と内面はヨコナデを施した後、施釉している。色調は灰白色で焼成は良好であるが内外面とも貫入がある。胎土は密で灰白色を呈す。

3は、白磁小皿破片である。西群の西側斜面の表土中から検出した。残存部は全体の1/6で、復元口径9.7cm、復元高台径4.3cm、器高2.1cmを測る。高台はケズり出しで体部中程から高台にかけて回転ヘラケズ



第10図 西群出土遺物実測図

りを行い、口縁部から内面にかけてはヨコナデを施している。外面の上部2/3から内面にかけて施釉し、見込み部には目跡の一部が確認できる。焼成は良好で、色調は施釉部、無施釉部とも灰白色で、胎土は密で灰白色である。15世紀代のものと思われる。⁽²⁾

第23図-1は、染付皿破片である。西群西側斜面の表土中から検出した。焼成は良好で胎土は灰白色を呈し密である。内面の呉須は藍色である。肥前産で17世紀第2四半期のものである。

4は、陶器碗である。W1号墓の西側配石の周辺の表土中から検出した。高台部は接合部付近から欠損し、体部の1/2が欠損している。復元口径13.0cmを測り、器高は推定で約5cmである。胎土は緻密で灰白色を呈し、全体の色調も灰白色である。焼成は良で、内面見込み部に蛇の目釉ハギがある。佐賀県嬉野町内之山窯跡の製品と考えられ、17世紀末から18世紀初頭のものである。

(2) 土師器 (第10図-5・6)

5は、土師器小皿で、ほぼ完形品である。口径6.7cm、底径5.2cm、器高1.4～1.5cmを測る。底部は回転糸切り痕が残り、内面見込みの中央部に高まりがある。体部は底部から直線的に開く。焼成は良好で、鈍い橙色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。

6は、土師器皿と思われる。口縁部を欠き、全体の約1/3が残り、復元底径6.2cmを測る。底部には回転糸切り痕が残り、体部の底部近くに回転ヘラケズリを施し、他はヨコナデである。焼成は良好で鈍い橙色を呈し、胎土に砂粒を含む。

第3節 東群の調査

1 東群の検出状況 (第4図)

東群は13基の石組墓と1基の一字一石経塚からなり、その立地する雛壇状の地形によって、さらにE-A群とE-B群の2つに分けられる。この群の墓は、頭にEをつけて番号を1～13まで用い、E1号墓～E13号墓と呼ぶことにする。

東群全域及びE1号墓、E2号墓の覆土上層から、スラッグ10数点を検出しているが、区からも多く検出しているため、分析は次年度に予定している。

(1) E-A群の検出状況

前述した西群の平坦面の北東側は、緩斜面になり、西群から10mほど東、比高差約2.5mほど上位にある平坦面がE-A群で、半月形を呈している。樹根による攪乱で土層観察では確認できなかったが、この面は斜面を削り出し、その排土を先端部に広げて造り出した可能性がある。平坦面東側は表土の堆積が薄く、石組墓検出面で地山が露出しているが、西側先端部は石組墓検出面と地山との間に約50cmの黒褐色土の堆積があったからである。

平坦部先端側(西側)に7基の石組墓のまとまりがある(以下「前列」と呼ぶ)。大小様々で、主軸の方向に一貫性はない。一部樹根により破壊されている。また、平坦面北東端には、一字一石経塚と石組墓が近接して位置する。一字一石経塚は、樹木の攪乱により、そのほとんどが失われていた。この2基の南東側に2基の石組墓があり、中心に五輪塔の地輪がそれぞれ据えられている(以下「後列」と呼ぶ)。この周辺には、水輪残欠や空風輪が、整理されたようにまとまって検出された。

E-A群の東側斜面には、石組墓と思われる集石が、落ち葉を取り除いただけで確認でき、この付近に新

たな群の存在が確実視される。

(2) E-B群の検出状況

E-A群平坦部南東に、比高差0.4～0.6mの一段高くやや南西に傾斜する等高線に平行に広がる面があり、調査区内で3基の石組墓を検出した。ここも他群同様検出面までの堆積は浅く、樹根により攪乱を受けているものが多い。

石組墓は、北西端に1基、6mほど南東に2基位置し、南東の石組墓北側に石段状の石列が2mほど等高線に沿って北西方向に検出されているが、調査区境界にあたり、墓地を区分する境界としての石列が、傾斜に設けられた石段かは不明である。

2 E-A群の調査

(1) E 1号墓 (第11図)

E 1号墓は、前列の最も北東に位置する。東西 (C-D) の主軸の方向は、GN - 58.5° - Eである。石組と西側配石からなる。

西側配石は、石組西面のほぼ中央部に5cmほど離して据えられている。大きさは、東西軸27cm、南北軸39cm、最大厚11cmを測り、角ばった石材で、上面はほぼ平坦な石材である。石材の大きさは、石組のものと変わらない。

石組の規模は、東西 (C-D) 1.33m、南北 (A-B) 1.25mを測り、ほぼ正方形を呈する。石材の配置は、石組の外周に10～40cm前後ものを配置し、その内側に河原石を置き、河原石の上に拳大～20cmの石材が十数個散在する。石組外周の石材は、西面 (D側) と北面 (A側) は石材の長軸面を揃えて整然と据えているが、東面 (C側) と南面 (B側) は据え方がやや雑である。石組の内側に、河原石が土に混じって15cmの厚さで敷き込まれ、総数175個を数えた。

地下遺構は、石材撤去面では確認できず、50cmほど下の地山面で長軸0.89m、短軸0.73mの土坑を検出することができた。両軸の方向は石組と同じである。石材撤去面での規模は、検出面の規模に0.2m程度加算した数値になると推定される。したがって土坑の規模は復元長軸1.09m、復元短軸0.93m、最深部推定深さ0.74m (検出時0.38m)、基底部長軸0.59m、短軸0.44mを測る。

覆土は、樹根等の攪乱が激しく分層は不可能で、基底部近くに地山混じりの暗黄褐色土が確認できるほかは、黒褐色土であった。基底部から30cm上位の範囲内で人骨が検出された。攪乱等で図化や写真に対応できる残存状況ではなかったが、頭蓋骨片が比較的上位から、大腿骨、脛骨が下位から検出されたため、土坑の規模も含めて推定すると、座位による埋葬と推定されるが、埋葬方向は不明である。また、鉄釘の検出がなく上部の石組の落ち込みも確認できないので、棺を用いたか否かは不明である。

出土遺物は、覆土上位から染付碗破片1点を検出している。(第23図-2) 残存は高台付近の1/6程度で、復元高台径4.7cmを測る。残存部は全面施釉で高台端部の釉を削り取りしている。外面体部と高台部、内面見込み部に呉須の染付を施している。胎土は密で、色調は灰白色を呈している。景德鎮産で16世紀末から17世紀第1四半期のものである。割れ面の一部に漆が付着しており、補修痕跡と思われる。また、覆土に混じって木炭を検出している。

(2) E 2号墓 (第12図)

E 2号墓は、前列E 1号墓の南側に隣接する。東西 (A-B) の主軸の方向は、GN-88.5° -Wであるが、

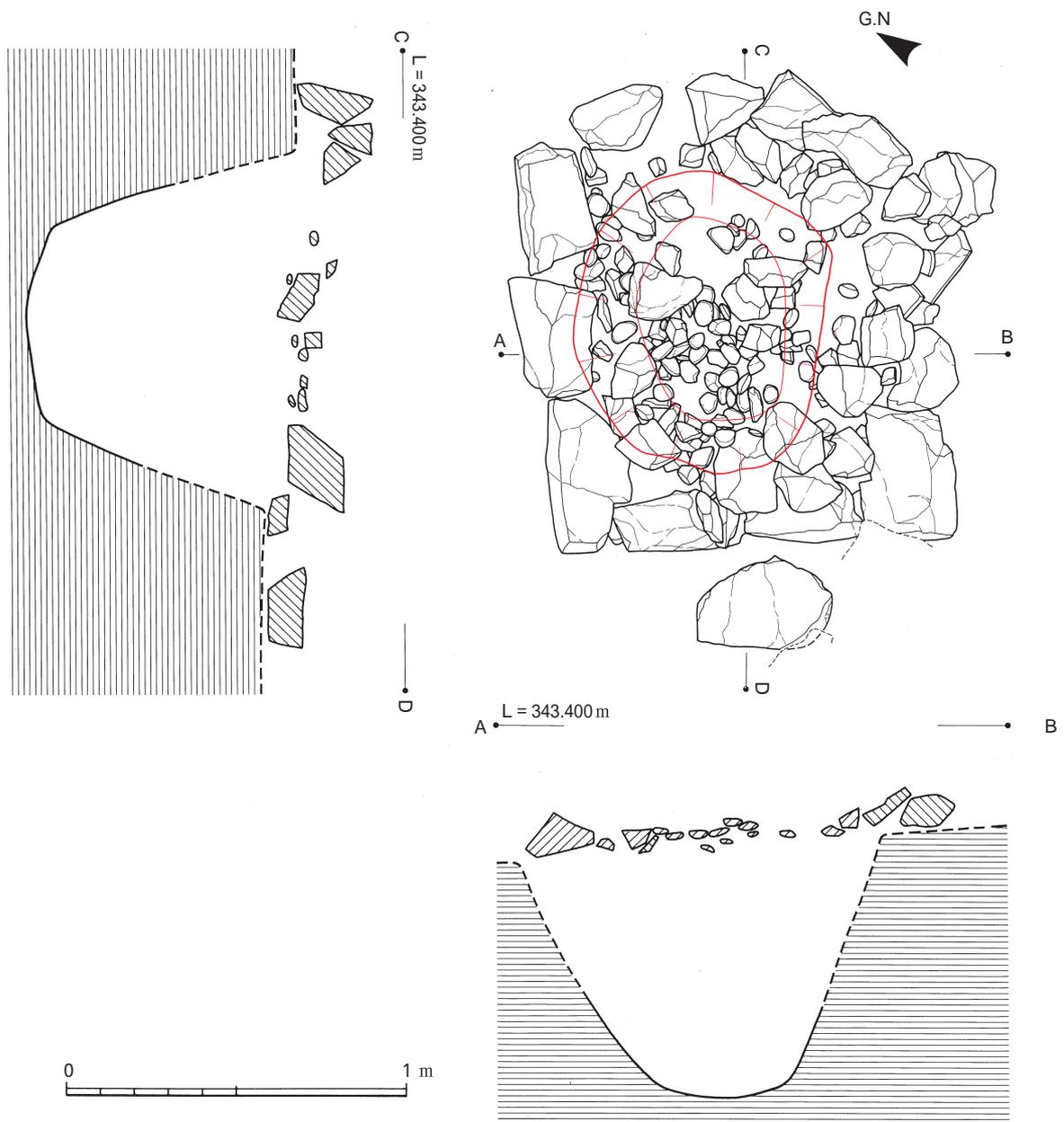
実測開始時に明確な主軸が判断できず、掲載図の方向とは異なっている。西側に配石はない。

石組の規模は、復元で東西（任意）1.57m、南北（任意）1.23mを測り東西に長い長方形を呈する。

石材の配置は、西側（D側）、南側（B側）と東側（C側）に拳大～35cm前後のものを配置し、北側（A側）から内側にかけて拳大～20cm前後の一回り小さい石材を置き、比較的雑な据え方である。他例に見られる内側の河原石はごく僅かで、総数10個であった。

地下遺構は、石材撤去面では確認できず、30～50cmほど下の地山面でGN-57.5° -Eの長軸0.92m、短軸0.79mの土坑を検出することができた。石材撤去面での規模は、検出面の規模に0.3m程度加算した数値になると推定される。したがって土坑の規模は復元長軸1.22m、復元短軸1.09m、最深部推定深さ0.68m（検出時0.38m）、基底部長軸0.69m、短軸0.54mを測る。

覆土は、樹根等の攪乱が激しく分層は不可能で、基底部近くに地山混じりの暗黄褐色土が確認できるほ



第11図 E1号墓実測図

かは、黒褐色土であった。基底部から約35cm上位の範囲内で人骨が検出された。攪乱等で図化や写真に対応できる残存状況ではなかったが、E 1号墓同様、頭蓋の一部が上位から、上腕骨の一部と大腿骨の一部が下位から検出されたため、土坑の規模も含めて推定すると、座位による埋葬と推定されるが埋葬方向は不明である。

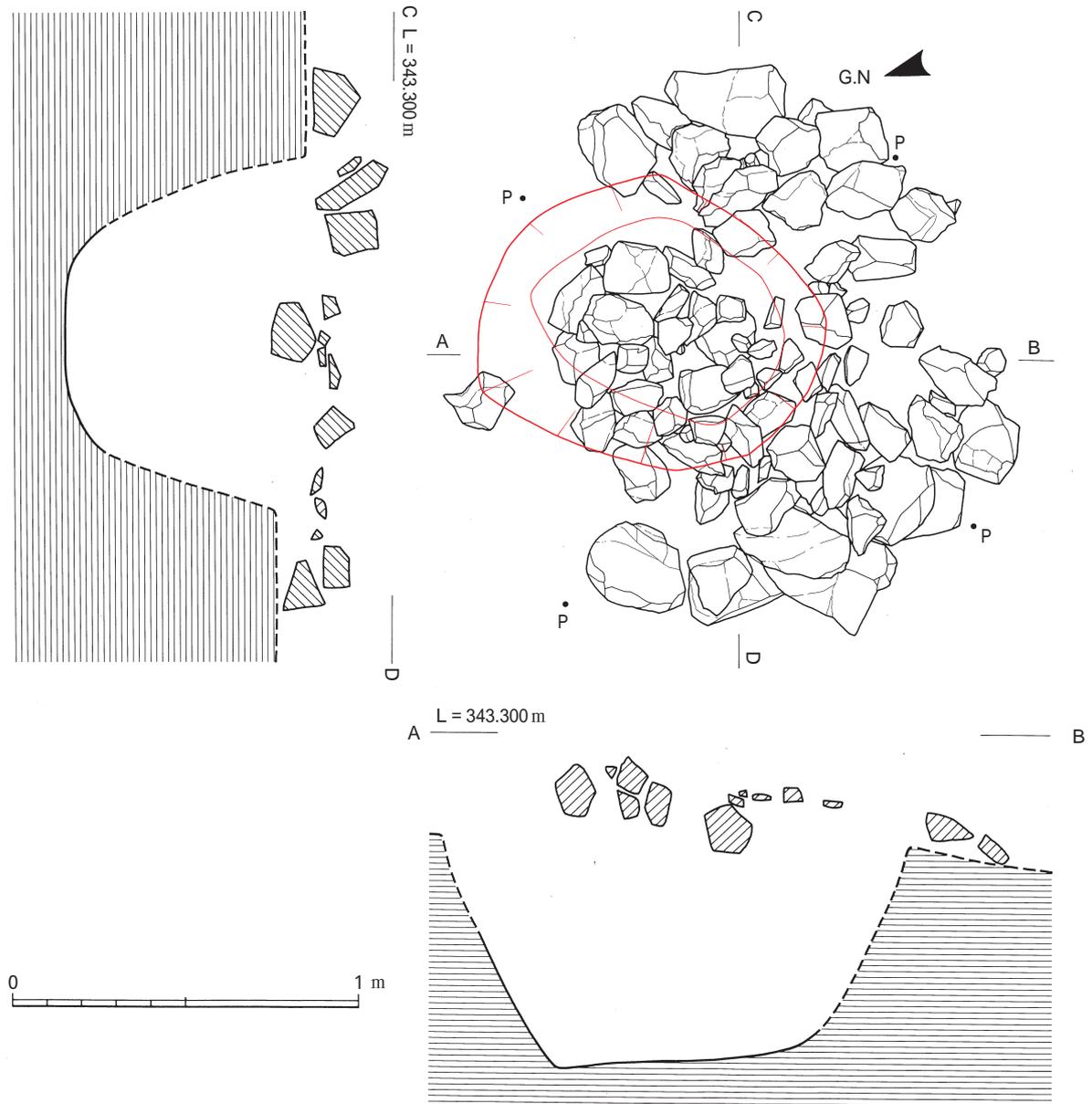
また、鉄釘の検出はなく、上部の石組の乱れが座棺陥没時の落ち込みによる可能性もあるが、石組の位置と土坑の位置のわずかな違いを、どう解釈するかという問題もあるため、明確には判断できない。

この墓から人骨以外に出土した遺物はない。

(3) E 3号墓 (第13図)

E 3号墓は、前列、E 2号墓の南側に隣接する。東西 (C-D) の主軸の方向は、GN-45.5° -Eである。西側に配石はない。

石組の規模は、実測の主軸で東西 (C-D) 0.92m、南北 (A-B) 1.05m (推定) を測り、樹根により石



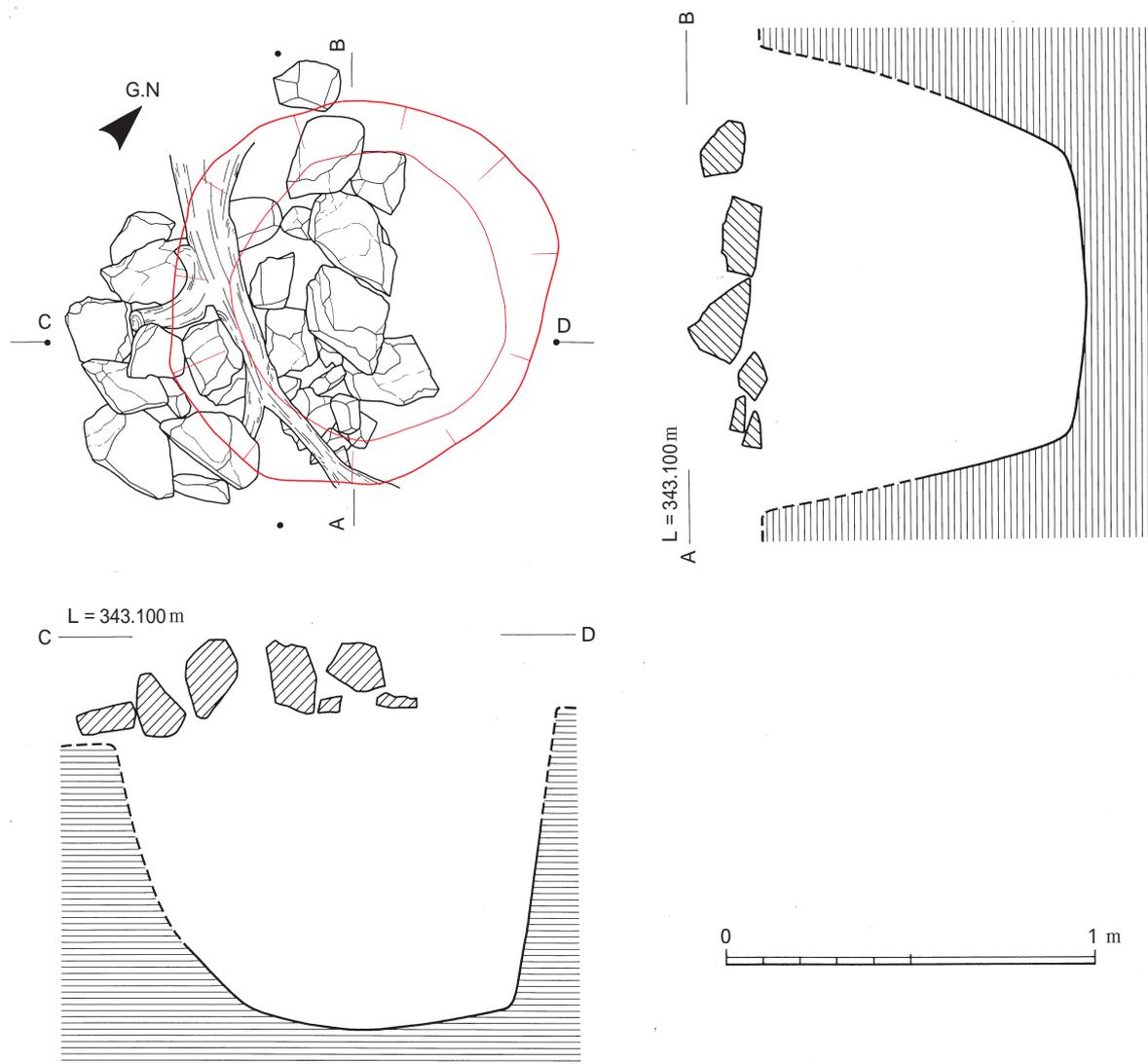
第12図 E 2号墓実測図

材が散逸、移動しているため、平行四辺形状を呈するが、当初は南北 (A-B) 方向に長い長方形形状を呈していたと考えられる。

石材の配置は、C-B間とA-D間が散逸しているため明確ではないが、周辺部に拳大～30cm大の石材を据え、内側に一回り小さい石材を置き、その下10～15cmの深さまで河原石を置いていたと思われる。河原石は内側以外にも移動しており、総数は193個であった。比較的残りのよい東面 (D側) 石組の外周に10～40cm前後のものを配置し、その内側に河原石を置き、河原石の上に拳大～20cmの石材が十数個散在する。石組外周の石材は、西面と北面は石材の長軸面を揃えて整然と据えているが、東面と南面は据え方がやや雑である。石組内側の河原石は、土に混じって15cmの厚さで敷き込まれ、総数は175個を数えた。

地下遺構は、前述2例同様、石材撤去面では確認できず、30～50cmほど下の地山面でGN-17.5° - Eの長軸1.11m、短軸0.99mの土坑を検出することができた。石材撤去面での規模は、復元長軸1.31m、復元短軸1.19m、最深部推定深さ0.85m (検出時0.45m) を測り、基底面長軸は石材撤去面の短軸方向となり0.77m、短軸は0.72mを測り、不整円形状である。

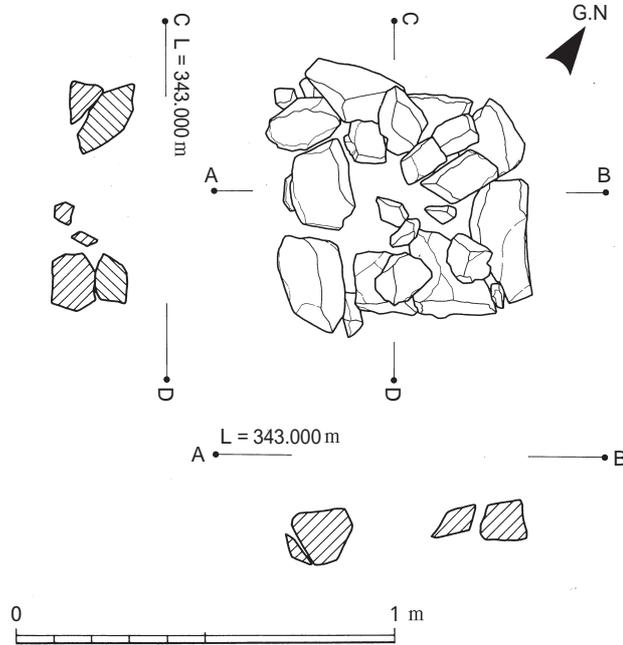
覆土は、樹根等の攪乱が激しく分層は不可能で、基底部近くに地山混じりの暗黄褐色土が確認できるほかは、黒褐色土であった。基底部から35cm上位の範囲内で人骨が検出された。攪乱等で図化や写真に対応



第13図 E3号墓実測図

できる残存状況ではなかったが、頭蓋の一部が検出されている。土坑の規模から座位による埋葬と推定されるが、埋葬方向は不明である。また、鉄釘の検出がなく、上部の石組の明確な落ち込みも確認できないので、棺を用いたか否かは不明である。またE 2号墓同様、石組と土坑の位置がややずれている。出土遺物は、人骨以外検出していない。

(4) E 4号墓 (第14図・15図・第23図-3)



第14図 E 4号墓実測図

E 4号墓は、前列、平坦部の先端のE 3号墓の南側に隣接し、東群の中で最も規模が小さい。東西 (A-B) の主軸の方向は、GN-55.5° -Eである。西側に配石はない。

石組の規模は、東西 (A-B) 0.63m、南北 (C-D) 0.61mを測り、ほぼ正方形状を呈する。

石材の配置は、各面15~30cm前後のものを2~4個、外面を揃えて据え、その上部や内側に10~15cm前後の石が置かれている。他例に見られる河原石は検出されなかった。

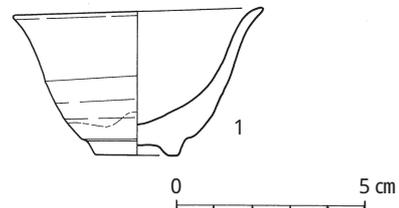
地下遺構は検出できなかったが、土坑の掘り込みが、検出可能な地山面まで達

していなかった可能性が強く、掘り込みの浅い土坑が存在したと思われる。

出土遺物は、石組下の黒褐色土から染付碗破片1点と盃1点を検出している。

第23図-3は、E 11号墓検出の破片と接合したため、墓に直接伴う副葬品ではなく、土坑内に流れ込んだ遺物と思われる。残存は接合後で口縁部と体部上半の1/6程度で、復元口径8.0cmを測る。内外面ヨコナデ後施釉し、焼成は良好で色調は青白色を呈す。呉須は濃い青色で、胎土は密である。肥前産で17世紀第2四半期のものである。

第15図-1は、口縁の一部を欠くが、ほぼ完形の陶器盃である。口径6.5cm、高台径2.2cm、器高3.6~3.9cmを測る。器形は外面高台から体部下半はやや丸みがあり、口縁部下からやや外反する。内面見込みは平坦な部分がない。高台はケズリ出しで、端部は平らに削られ、部分的に幅が異なる。体部下半は回転ヘラケズリで、口縁部下から内面にかけてはヨコナデを施している。胎土は密で焼成は良好、内面から高台のやや上まで施釉しており、施釉部分の色調は淡青灰色、無施釉部分は灰白色である。肥前産で17世紀第2四半期のものである。



第15図 E 4号墓出土遺物実測図

(5) E 5号墓 (第16図)

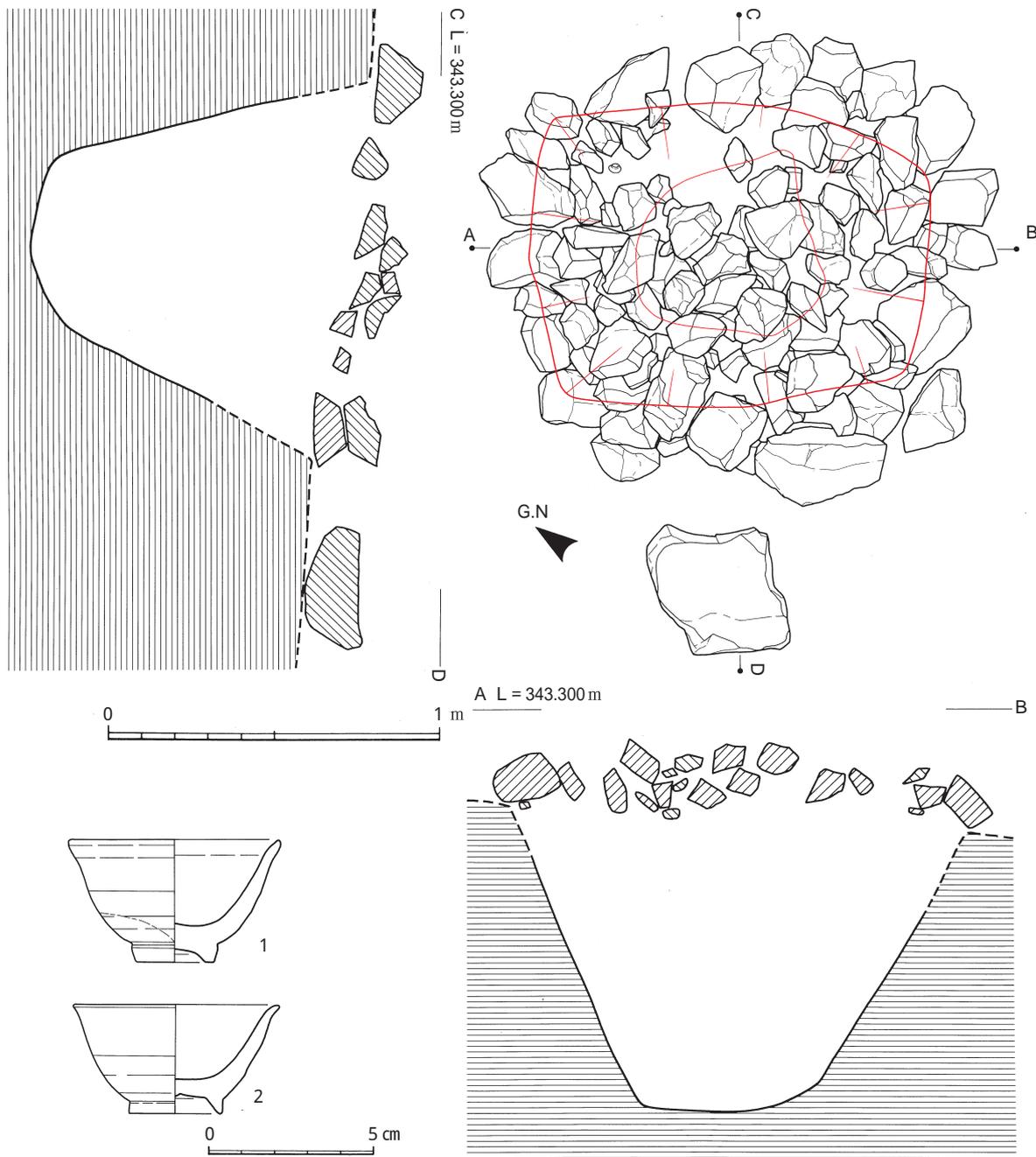
E 5号墓は、E 3号墓東側に位置し、東西 (C-D) の主軸の方向は、GN-57° -Eである。石組と西側配

石からなる。

西側配石は、石組西面（D側）のほぼ中央部に西面から20cmほど離して据えられている。大きさは、東西軸37cm、南北軸37cm、最大厚15.5cmを測り、角張りで上面がほぼ平坦な石材である。石材の大きさは、石組中の最大のものより一回り大きい。

石組の規模は、東西（C-D）1.29m、南北（A-B）1.51mを測り、やや南北（A-B）方向に長い形状である。

石材の配置は、石組の外周に10～40cm前後ものを配置し、その内側に10～20cm前後の石を重ねて置いている。外周は、他例で見られた縦長の石材で面を揃える配置は見られず、比較的簡易に据えている。内側の石材下から約15cmまで、土に混じって河原石を置いており、総数は95個を数える。



第16図 E5号墓・出土遺物実測図

地下遺構は、石材撤去面で確認できず、10～30cmほど下の地山面で長軸1.19m (A-B)、短軸0.92m (C-D) の土坑を検出することができた。長軸の方向はGN-33° -Wである。石材撤去面での規模は、復元で長軸1.37m、短軸1.15mと推定される。深さは最深部推定0.98m (検出時0.79m) で、基底面は長軸 (C-D) 0.54m、南北 (A-B) 0.51mを測り不整形形状である。この土坑の位置と平面形は、石組とほぼ一致する。

覆土は、樹根等の攪乱が激しく分層は不可能で、基底部近くに地山混じりの暗黄褐色土が確認できるほかは、黒褐色土であった。基底部から30cm上位の範囲内で人骨が検出された。攪乱等で図化や写真に対応できる残存状況ではなかったが、上腕骨と大腿骨等を検出している。土坑の規模から座位による埋葬と推定されるが、埋葬方向は不明である。また、鉄釘の検出がなく、上部の石組の明確な落ち込みも確認できないので、棺を用いたか否かは不明である。

出土遺物は、石組内側から陶器盃1点、覆土上位から陶器盃1点を検出している。(第16図)

1は、陶器盃で1/2が残存する。石組の内側で石組と同時に検出した。復元口径6.4cm、復元高台径2.5cm、器高3.7cmを測る。器形は外面高台から体部下半はやや丸みがあり、口縁部下で緩やかに屈曲してやや外反する。高台はケズリ出しで、端部は平らに削られ、部分的に幅が異なる。体部下半は回転ヘラケズリで、口縁部下から内面にかけてはヨコナデを施している。胎土は密で焼成は良好、内面から高台のやや上まで(一部高台にかかる)施釉しており、施釉部分の色調は灰色、無施釉部分は灰褐色である。肥前産で17世紀第2四半期のものである。

2は、ほぼ完形の陶器盃で、高台の一部が欠損している。口径6.2cm、高台径2.8cm、器高3.3cmを測る。器形は外面高台から体部下半はやや丸みがあり、口縁部下からやや外反する。高台はケズリ出しで、断面三角形に近い形状であるが、欠損部が平らに削られていた可能性もある。体部下半は回転ヘラケズリで、口縁部下から内面にかけてはヨコナデを施している。胎土は密で焼成は良好、内面から高台のやや上まで(一部高台にかかる)施釉しており、施釉部分の色調は淡青灰色、無施釉部分は灰白色である。肥前産で上記1同様17世紀第2四半期のものである。

(6) E 6号墓 (第17図)

E 6号墓は、E 5号墓南側に近接して位置し、東西 (C-D) の主軸の方向は、GN-52° -Eである。西側に配石はない。

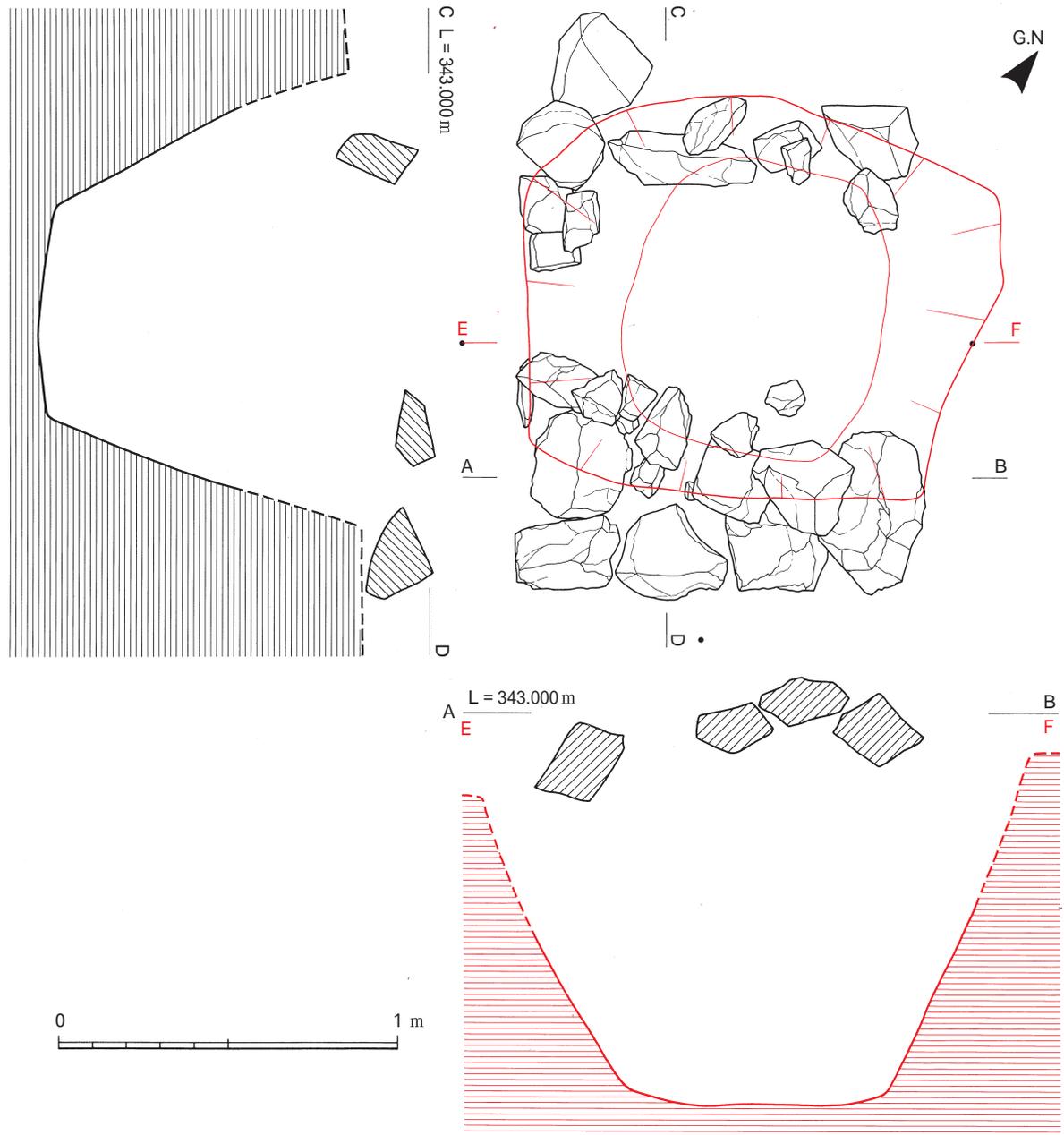
石組の北面 (C側) と南面 (D側)、西面 (E側) の両サイドが残存し、東面 (F側) と内側のほとんどは樹根等の攪乱により石材を失っている。

石組の規模は、北面が1.14m、南面が1.15m、西面が1.45mを測り、概ね東西 (E-F) 1.15m、南北 (C-D) 1.45mの長方形を呈していたと思われる。

石材の配置は、残存している3面は、15～45cmの石材の直線面を外に向けて配置しており、比較的整然としている。失われた部分も同様の据え方であったと思われる。

内側のほとんどは石材が失われ、明確な配置は分からないが、南側 (D側) に一部残る石材から推定すると、10～25cm大の石材を、任意に配置していたと思われる。内側下層から、河原石も僅かに検出しており、36個を数えた。

地下遺構は、前述同様、石材撤去面では確認できず、30～40cmほど下の地山面で基底部の形状からの東西 (任意) 主軸GN-66° -Eの長軸1.33m (復元1.53m)、短軸1.18 (復元1.38m) の土坑を検出することができた。最深部推定深さ0.91m (検出時0.62m)、基底部長軸0.85m、短軸0.76mを測り、隅丸胴張方形を



第17図 E 6号墓実測図

呈する。

覆土は、樹根等の攪乱が激しく分層は不可能で、基底部近くに地山混じりの暗黄褐色土が確認できるほかは、黒褐色土であった。

人骨は検出していないが、他の例から埋葬方法は土葬と考えられる。また、石組と土坑の位置は、ほぼ一致している。遺物は出土していない。

(7) E 7号墓 (第18図)

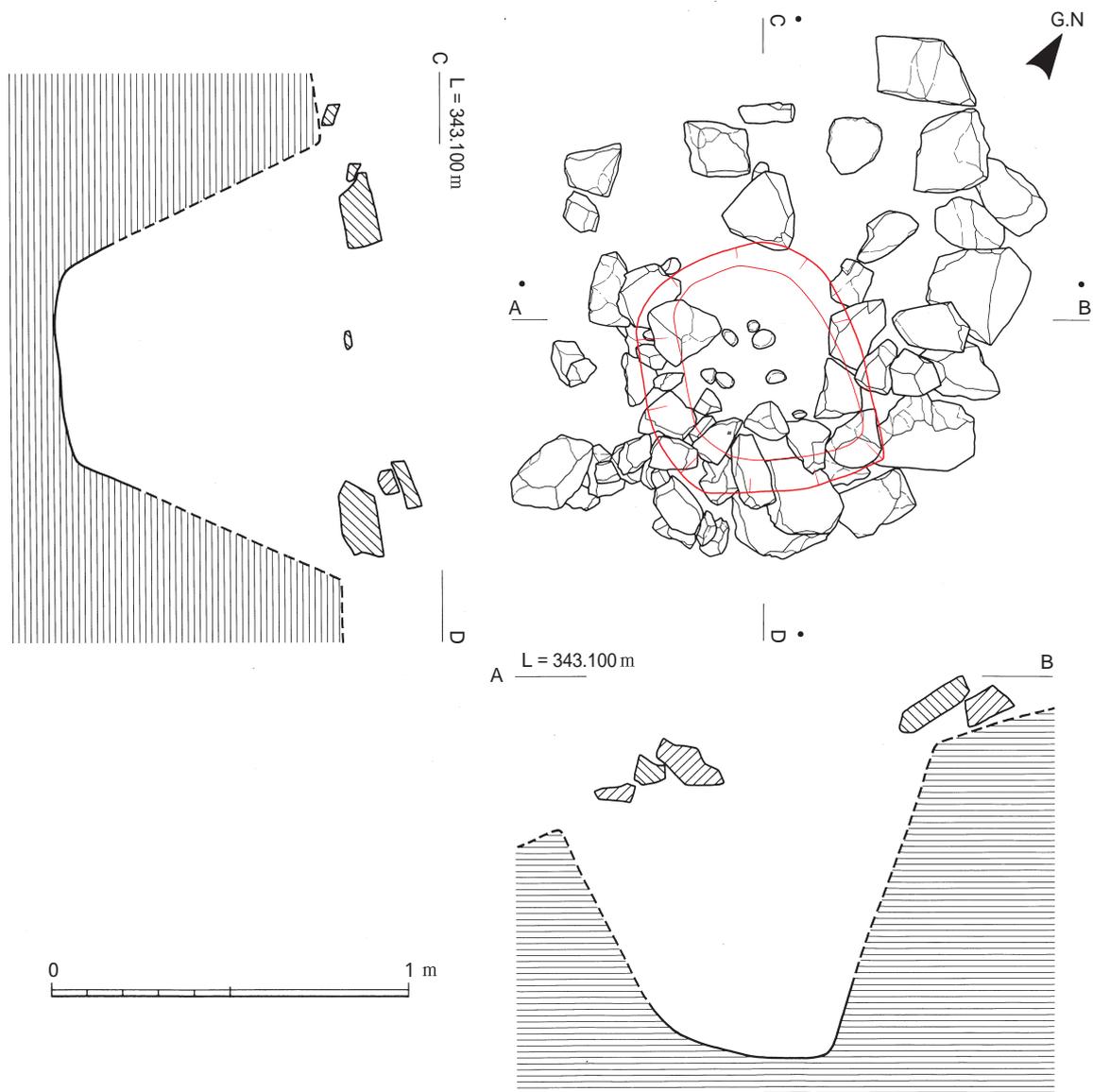
E 7号墓は、E 6号墓の南東約1.2mに、やや離れて位置する。東西 (A-B) の主軸の方向はGN-54°-Eであるが、石材の据え方が雑なのか、樹根の攪乱で移動しているかで、明確な軸が不明である。西側に配石はない。

第3節 東群の調査

石組の規模は、図上の仮主軸で東西 (A-B) 1.47m (推定)、南北 (C-D) 1.41m (推定) を測り、概ね正方形を呈していたと思われる。

石組の主軸は、比較的残存のよい東面 (B側) と南側 (D側) から推定したものである。東面 (B側) は最も残りがよく、20~30cm大の石材を一部直線面を外面に向けて配置し、それに半分かかるように内側に同規模の石材を置いている。南面 (D側) は、面を構成する石材の一部を失っていると思われ、20~30cmの石材が3個ほど残り、内側にかけて置かれていたと思われる10~20cm大の石材が散らばり、一部は当初の位置だったと思われる。北面 (C側) と西面 (A側) は面を構成する石材は残存せず、内側にかけて置かれていたと思われる10~15cm大の石材が散在する。内側も同規模の石材が散在し、石材下面から10cmほど下位まで、土に混じって河原石を検出しており、総数51個であった。

地下遺構は、石材撤去面では確認できず、50~60cmほど下の地山面で長軸0.70m、短軸0.62mの土坑を検出することができた。長軸は基底面で決定しGN-58° -Wである。本来の土坑の規模は、石材撤去面で長軸1.1m前後、短軸1.0m前後の正方形に近い形状だったと思われる。深さは最深部で石材撤去面から推



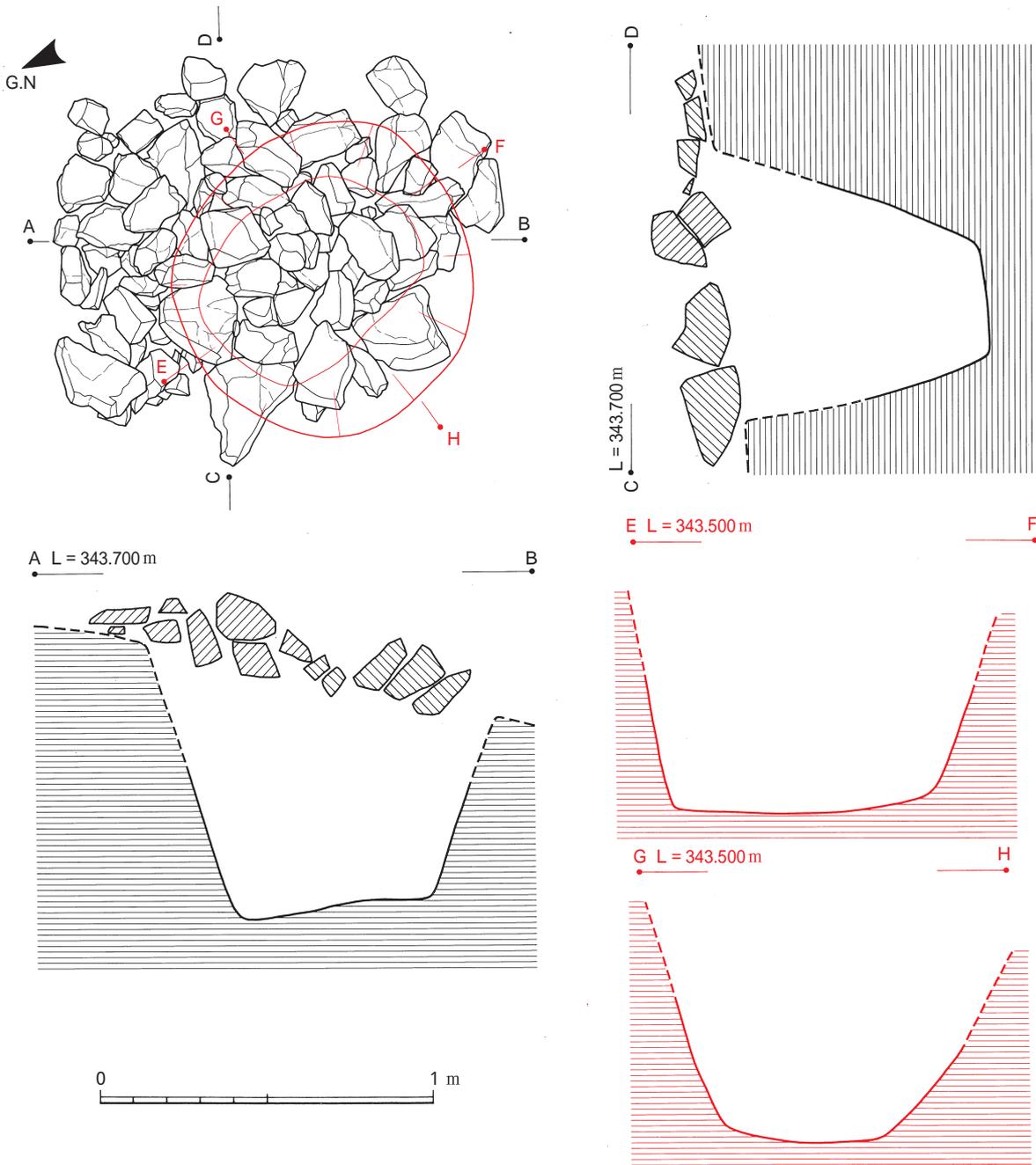
第18図 E7号墓実測図

定0.8m、検出面から0.25mを測り、基底面は長軸0.55m、短軸0.44mで、やや不整の隅丸方形である。

覆土は、樹根等の攪乱が激しく分層は不可能で、基底部近くに地山混じりの暗黄褐色土が確認できるほかは、黒褐色土であった。基底部から20cm上位の範囲内で人骨が検出された。攪乱等で図化や写真に対応できる残存状況ではなかったが、頭蓋片が比較的上位から、大腿骨等が下位から検出されたため、土坑の規模も含めて推定すると、座位による埋葬と推定されるが、埋葬方向は不明である。人骨以外の出土遺物は検出されなかった。

(8) E 8号墓 (第19図)

E 8号墓は、後列の北端に位置し、北西側に一字一石経塚が隣接する。東西 (A-B) の主軸の方向は、



第19図 E 8号墓実測図

GN-113.5° -Eである。西側配石はない。

石組の規模は、東西 (C-D) 1.19m、南北 (A-B) 1.21mを測るが、東西は原位置を移動しているものや、大きめの石材が出ている部分の計測を含めたため、1.0m前後と推定され、やや南北 (A-B) 方向に長い方形状である。

石材の配置は、石組の外周4面に10～40cm前後のものを配置し、その内側に、10～20cm前後の石の上面を内側に向けて任意に配置している。外周に面を揃える配置は見られず、比較的簡易に据えている。河原石は数個見つかっているが、隣接する経塚からの流れ込みと思われる。

地下遺構は、石材撤去面では確認できず、10～30cmほど下の地山面で長軸 (E-F) 0.91m、短軸 (G-H) 0.87mの隅丸胴張方形の土坑を検出することができた。長軸の方向は、GN-13° -Wである。

石材撤去面での規模は、復元で両軸1.1m前後と推定される。深さは、最深部で復元値0.67m (検出時0.37m) で、基底は長軸 (E-F) 0.67m、短軸 (G-H) 0.48mを測る。この土坑の位置と平面形は、石組とややずれる。

覆土は、樹根等の攪乱が激しく分層は不可能で、基底部近くに地山混じりの暗黄褐色土が確認できるほかは、黒褐色土であった。基底部から30cm上位の範囲内で人骨が検出された。攪乱等で図化や写真に対応できる残存状況ではなかったが、頭蓋が比較的上位から、大腿骨等が下位から検出されたため、土坑の規模も含めて推定すると、座位による埋葬と推定されるが、埋葬方向は不明である。また、鉄釘の検出がなく、上部の石組の明確な落ち込みも確認できないので、棺を用いたか否かは不明である。

他に、炭化物とスラッグを少量検出している。炭化物は科学測定の結果、17世紀中葉の年代が報告されている。

(9) E 9号墓・E 10号墓 (第20図)

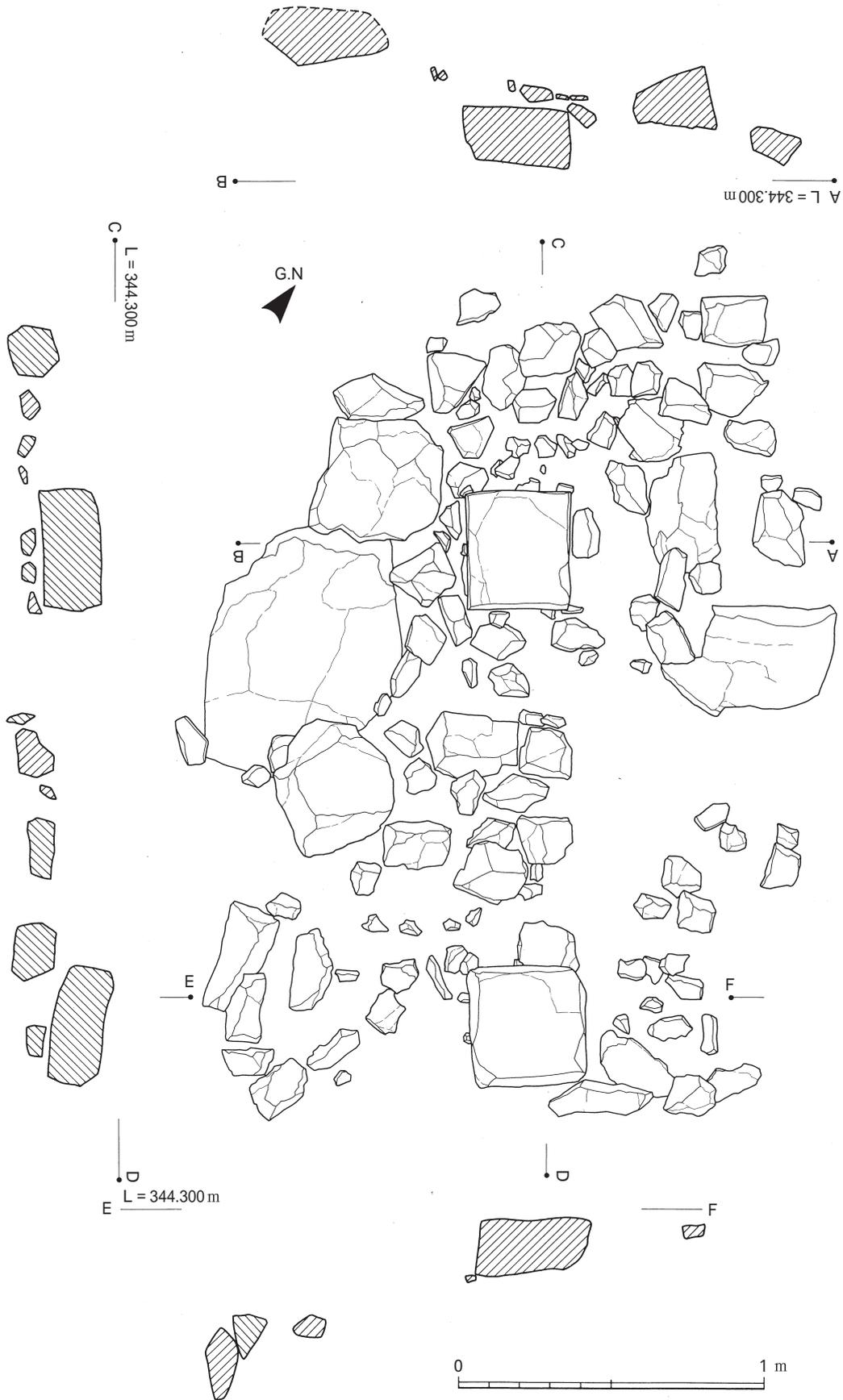
E 9号墓、E 10号墓は、後列E 8号墓南東に、2基接して位置し、背後は上り斜面となっており、一部地山が露出している。東西 (A-B・E-F) の軸は、GN-49° -Eである。

E 9号墓の西面 (B側) は、地山に含まれる約80cm大の岩が位置し、その両端 (南北) に40～50cm大の石材が置かれるのみで、他の石材はない。北面 (C側) は、10～20cm大の石材が並び、特に規格性を見いだせない。東面 (A側) も並び方に明確な規格がなく、中央に位置する40cm大の石材は、直線面を外側に向けているが、他は10～20cm程度の石材が点在するのみで、特に東側 (A側) のものは移動しているものが多いと思われる。南面 (D側) は、E 10号墓の北面の石材と接する部分に15cm大と25cm大の石材2個が直線面を外側に向けて配置しており、他に面を構成する石材はない。内側は、5～15cm大の石材が散在しており、その上に五輪塔の地輪が、ほぼ平行に据えられている。

以上のように、石材を失っている部分が多く、正確に石組の規模を復元することはできないが、地輪がほぼ中央に据えられていると考えて、石材位置を観察すると、地輪中心から各面に向けて0.6～0.7mの位置に石組の範囲が推定できる。したがって、石組の規模は東西 (A-B) 方向1.3m、南北 (C-D) 方向1.4mと推定される。

石組撤去後、地下遺構の検出のため黒褐色土を掘り下げたが、15cmほどで完全に地山に達し、遺構、遺物は検出されず、掘り出した土から、骨片等は検出されなかった。

第21図-9は、E 9号墓中央に据えられた五輪塔地輪である。上面幅37.5cm、高さ17.0～19.2cm、下面幅40.8cmを測る。やや不整形で部分的にノミ痕跡が残り、仕上げは粗い。稜線部などの風化による欠落が激しい。



第20図 E9・E10号墓実測図

E 10号墓は、各面を構成する石材のほとんどが失われていると思われ、北面（C側）のE 9号墓南面石材に隣接する15～20cm大の3個と周辺の石材が、本来の位置を留めていると思われ、東面（F側）、西面（E側）、内側は5cm～30cm大の石材が散布し、南側（D側）にいたってはほとんど石材が残っていない。五輪塔地輪が位置する場所が中央と考え、東西（C-D）方向1.4m、南北は石材の広がりから、E 9号墓と同規模の1.3m程度と推定される。地下遺構、遺物、人骨等はE 9号墓同様検出していない。

第21図-8は、E 10号墓の五輪塔地輪である。上面幅39.8cm、高さ16.0～19.0cm、下面幅は推定で43cmを測る。部分的にノミ痕跡が観察でき、仕上げはやや粗い。稜線部などは風化による欠落が激しい。

(10) E-A群周辺出土遺物（第21・22図）

五輪塔残欠（第21図）

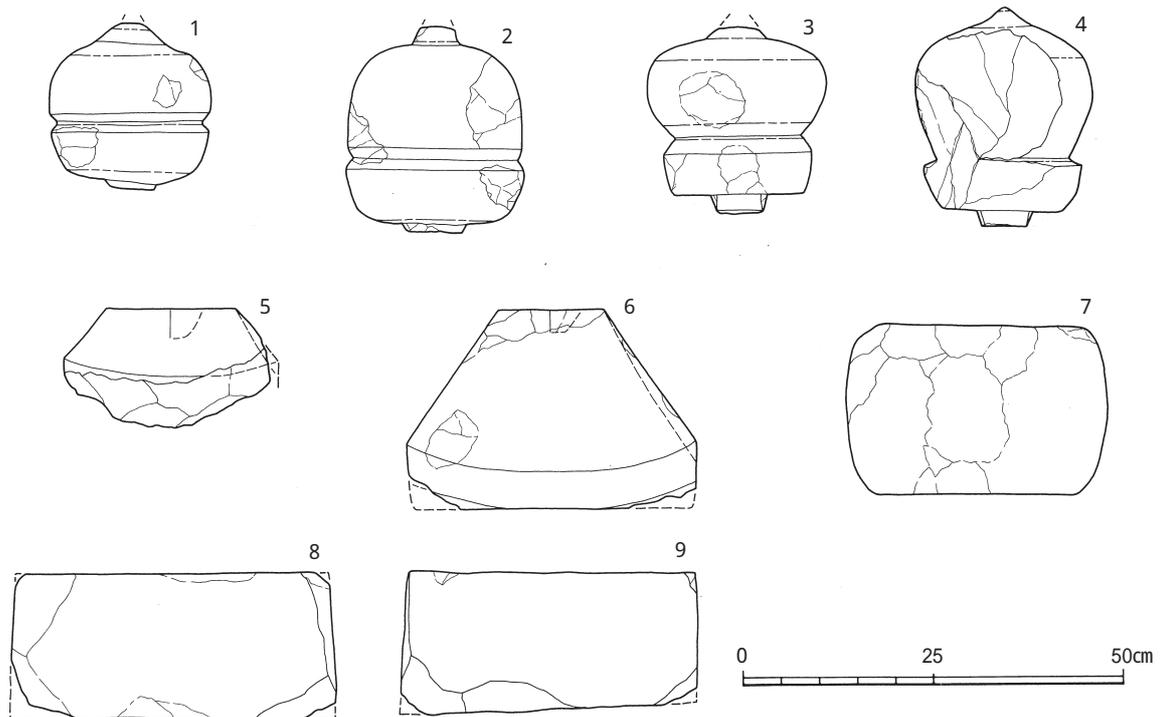
1～3は、E 10号墓地輪北西の石組推定範囲の上に、整理したように三つ又状に置かれていた空風輪である。

1は、頂部がわずかに欠損しており、頂部三角形部分は、欠損部から下方へ2.6cmで径9.4cmに広がり、そこから7.6cm下方の風輪部境まで緩やかな曲線で広がり最大径21.0cmを測る。くびれ部分は上場幅2.4cm、下場幅0.5cm、深さ約1cmの溝を設けるのみで、空輪下部を丸くしようという意図は見られない。溝を設けるだけで空輪部と風輪部を区別するという簡易な方法で造っている。くびれ下の風輪部径は20.6cmを測り、下方5.2cmまで緩やかに狭まり、径16.5cmとなる。そこから下方1.5～2.0cmで径6.5cmと一気に狭まり、やや傾いた高さ1.0～1.5cmの短い接続突起を造り出している。残存状態は比較的良好で、整形はやや丁寧である。

2も整形のしかたは、1と同様で、1よりやや高さの比率が高く頂部がやや長くなると推定される。頂部がやや欠損しており、頂部三角形部分は、欠損部から下方へ2.7cmで径6.7cmに広がり、そこから13.5cm下方の風輪部境まで緩やかな曲線で広がり空輪部の最大径21.0cmを測る。くびれ部分は上場幅2.4cm、下場幅0.2cm、深さ約0.8cmの溝を設けるのみで、空輪下部を丸くしようという意図は見られない。溝を設けるだけで空輪部と風輪部を区別するという簡易な方法で造っている。くびれ下の風輪部径は23.2cmを測り、全体の最大径となっている。下方7.1cmまで緩やかに狭まり、径16.4cmとなる。そこから下方0.7cmで径10.5cmと一気に狭まり、高さ1.0cmの短い接続突起を造り出している。残存状態は比較的良好で、整形はやや丁寧である。

3は、前述1、2とやや形態が異なる。頂部がやや欠損しており、頂部三角形部分は、欠損部から下方へ1.8cmで径8.7cmに広がり、そこから2.8cm下方で径22.4cmと一気に広がり、3.5cm下方で最大径23.4cmを測る。最大径から4.9cm下方でわずかに屈曲して、そこから1.8cm下方で最もくびれた部分となり径16.7cmを測る。前2例からすると、まだ丸くしようという意図が窺える。くびれから2.0cm下方で風輪部最大径19.4cmを測り、直線的に径が広がり、下方5.3cmの風輪部下面まで胴張のラインで径を狭め径17.0cmを測る。風輪部下面から付け根の一边7.3cm、高さ2.5cm、先端部一边6.1cmの断面正方形の接続突起を造り出している。残存状態は比較的良好で、整形はやや丁寧である。

4は、E 10号墓前面（南西側）に、石列状に並んだ石材の一部に据えられていた空風輪である。全体の2/5ほど剥落している。頂部三角形部分は、頂点から下方へ2.6cmで径9.7cmに広がり、そこから4.2cm下方で径21.8cmと一気に広がり、傾斜を変えて広がり3.8cm下方で最大径23.4cmを測る。最大径位置からやや直線的になり、9.2cm下方で最もくびれた部分となり径17.6cmを測る。前述3同様、まだ丸くしようという意図が窺えるが、3より下部は簡略化している。くびれから1.1cm下方で風輪部最大径21.6cmを測り、緩



第21図 東群五輪塔実測図

やかな曲線で径を狭めながら、下方5.9cmの風輪部下面に至り、径15.8cmを測る。風輪部下面から付け根で一辺7.5cm、高さ1.9cm、先端部一辺6.3cmの断面正方形の接続突起を造り出している。残存部も風化が激しく整形状態はよく分からない。

5は、E10号墓地輪北側に接して、石組の上面から検出した火輪である。風化が激しく、特に軒部から下は、本来の形状を推定できないほど欠落部が多い。上辺で幅17.0cmを測り、中央部に上面8.5cm、基底面径3.5cm、深さ3.9cmの孔が穿たれている。軒の中央部と隅部の比高差は2.1cmで、中心から約5.5cmの位置から上方へ緩やかに反り上がる。上辺から軒までの稜線に丸みはほとんどなく、直線的である。軒端と基底部の形状は欠落で復元できない。総高15.7cmを測る。整形はやや粗い。

6は、本調査に入る前の現地踏査で、前列周辺付近で確認されていた火輪である。上辺13.5cmを測り、中央部に上面で8cm四方、基底面径4.0cm、深さ2.5cmの上面正方形、基底面円形の孔が穿たれている。軒は、中心から両側へ6.5cmほど水平に伸び、幅38.0cmで3.8cm上方に反り上がる。軒下幅は、36.5cmを測り、やや狭まる。上辺から軒までの稜線は直線的で丸みはない。基底面は風化による剥落が激しく、形状がよく分からない。高さは26.5cmである。

7は、E-A群の平坦部南東端から検出された水輪で、部分的に破碎していたものを接合したものである。最大径は、ほぼ中位にあり34.2cmを測る。上面は径26.0cm、基底面は径26.5cm、高さ22.0cmを測る。胴部のラインは、上面と基底面近くは屈曲が大きく、中央部は緩やかである。明確ではないが、上面中央に突起が欠落したような痕跡が見られる。

貨幣 (第22図)

貨幣は、E-A群平坦部北西斜面から表土掘り下げ時に2枚検出している。

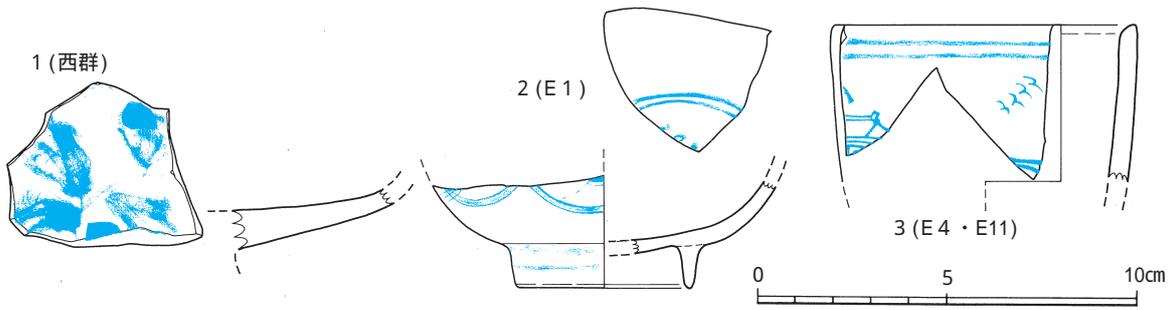
1は朝鮮通寶である。磨耗はほとんどなく、文字は明瞭に読み取れる。鑄造年代は朝鮮世宗(1423)の頃で、15世紀中葉以降流通したと思われる。九州では出土例が多く^{③)}、福岡県久原村や佐賀県江北村で、

計608枚出土している。

2は、宋銭の元符通寶である。磨耗が激しく、文字は辛うじて読み取れる程度である。鑄造年代は北宋の宗哲宗（1098）の頃で、12世紀以降に流通したと思われる。全国的に広く大量に出土している。

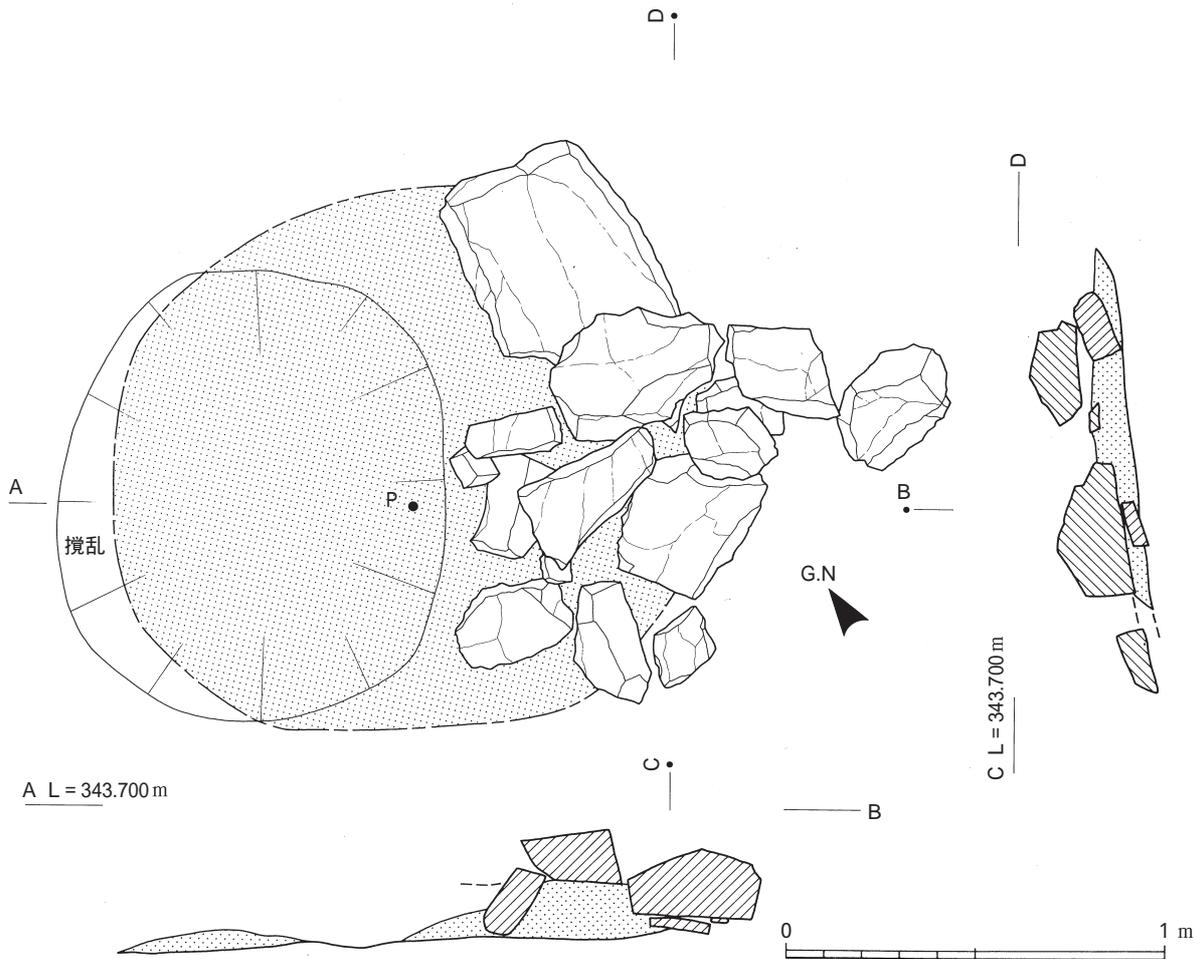


第22図 貨幣拓本 (1 / 1)

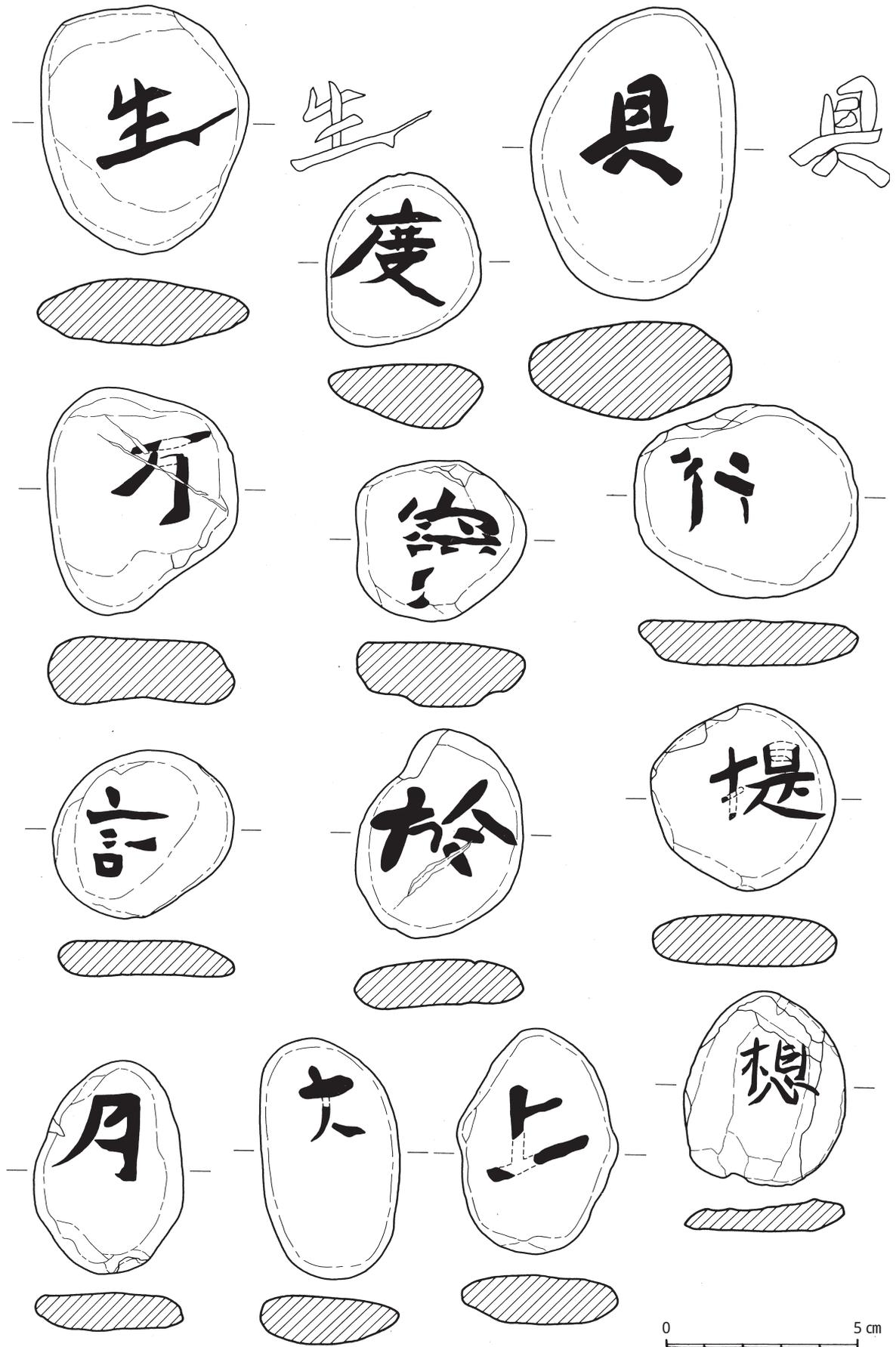


第23図 遺物実測図 (染付)

(11) 一字一石経塚 (1号経塚) の調査 (第24・25図)



第24図 1号経塚実測図



第25図 経石実測図

1号経塚は、後列、E8号墓の北西に隣接し、E-A群の平坦部の北西端部に位置する。当初は樹木による攪乱で、破壊された墳墓と認識して調査を進めていたが、念のため、取り上げた河原石を水洗いしたところ、19個の石に墨書があることが分かり一字一石経塚と認識した次第で、通常の一石一石経塚調査の手順を踏まえた調査を行っていないため、得られた情報が少なかった。

残存状況から見ると、中心と思われる部分は樹根により攪乱を受けており、西側1/3ほどが残存していると思われる。残存部分は、10～50cm大の石が集められており、規格性は見いだせない。

この石の中央部下に10cmの厚さで、河原石（以下「経石」とする）が密に堆積しており、上部から攪乱を受けていたが、その範囲が北西に広がっていることは確認できた。残存部を含めてA-B方向に約1.5m、C-D方向に約1.45mの不整形の範囲と推定される。（網掛け部）

一般的な一字一石経塚の場合、地面に大きな穴を掘り経石を入れ、塚を造り「大乘妙典一字一石」と刻まれた石碑を建てる場合が多いが⁽⁴⁾、土坑状の掘り込みや、土を持った塚の痕跡、石碑の残欠は確認できなかった。あるいは、浅い土坑に経石を入れ、周辺に散布する石材で塚を造り、木製の碑を建てていた可能性もある。

墨痕跡を確認できた経石は、周辺も含めて拾い集めた総数1930個中19個で、文字が解読できたものは⁽⁵⁾「度」、「想」、「生」、「具」、「言」、「提」、「大」、「月」、「行」、「万」、「上」、「於」、「寧」の13個であった。判読できた文字を、法華経データベース⁽⁶⁾を用いて検索したところ、13個すべての文字が検索できた。（第4表）他の経典での検索は試みていないので、統計的にこれだけの数で法華経とは断定できないが、可能性は高いと考えている。

3 E-B群の調査

(1) E11号墓（第26図）

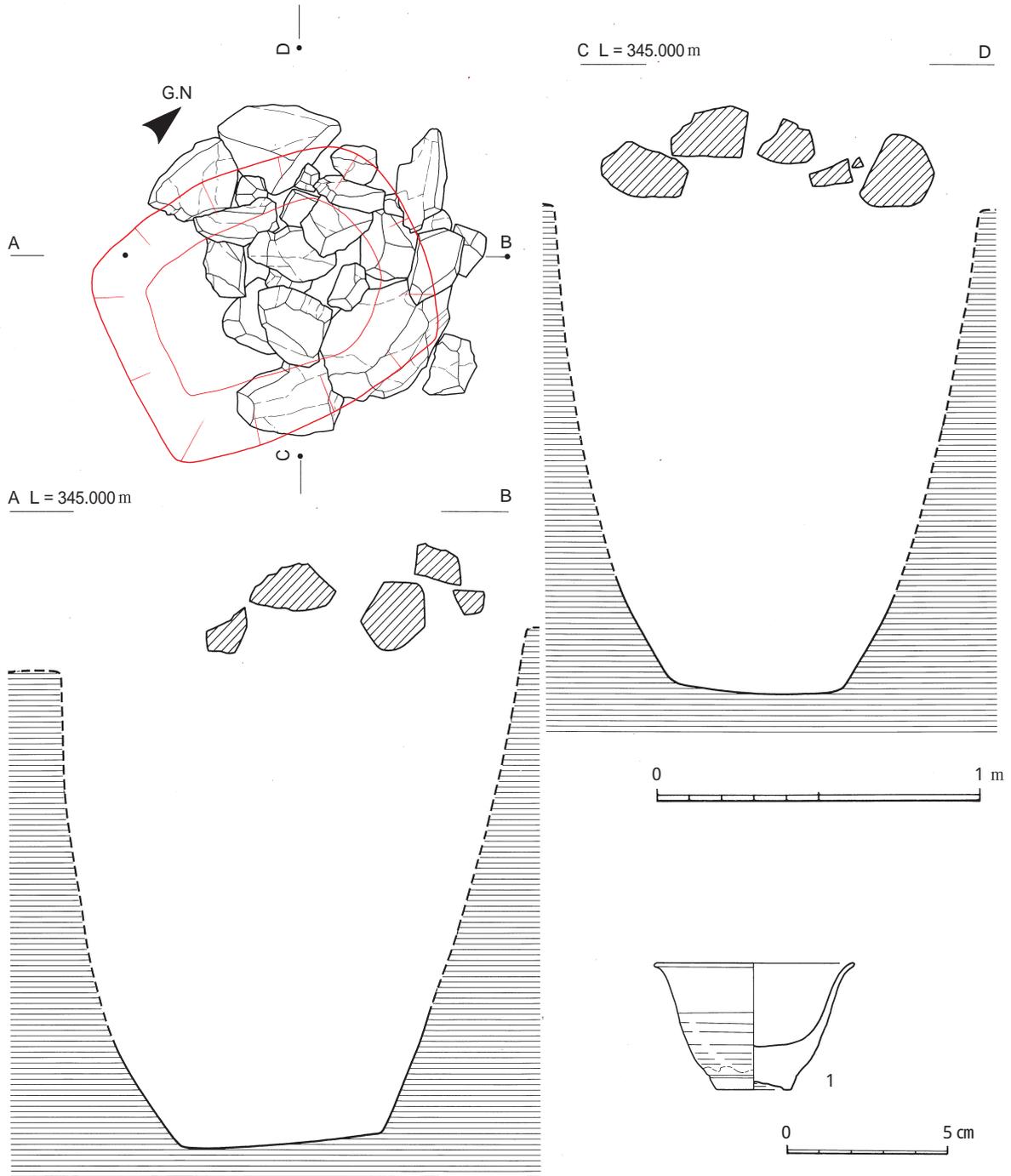
E11号墓は、E-B群の平坦面の南西端にあり、E-B群ではE-A群に最も近接する墳墓である。石組の主軸は明確に判断できないが、B側の石材の並びで主軸を設定すると、東西（A-B）の主軸の方向は、GN-42.5° -Eであるが、石材の据え方が雑なのか、移動しているかで、明確な主軸が不明である。西側に配石は持たない。

石組の規模は、図上の仮主軸で東西（A-B）0.86m、南北（C-D）1.03mを測るが、D側は斜面の自然崩落により失われているので、A-B間もC-D間と同規模であったと推定され、本来は正方形を呈していたと思われる。

石材の配置は、石材の直線面を活かさずに方形に据え、内側にも石材を任意に据え、その内側にもう一段石材を置いている。石材の大きさは、10～35cm大である。西群やE-A群で見られた、内側の河原石は検出されなかった。

地下遺構は、石材撤去面では確認できず、1.1mほど下の地山面で長軸（GN-15.5° -E）1.01m、短軸0.82m、基底面長軸0.71m、基底面短軸0.49m、最深部推定深さ1.55m、（検出時0.38m）の土坑を検出することができた。石材撤去面での規模は、検出面との差が大きく、復元できないが、石組とほぼ同じと考えている。

覆土は、樹根等の攪乱が激しく分層は不可能で、基底部近くに地山混じりの暗黄褐色土が確認できるほかは、黒褐色土であった。基底部から35cm上位の範囲内で人骨が検出された。攪乱等で図化や写真に対応できる残存状況ではなかったが、頭蓋の一部が比較的上位から、大腿骨が下位から検出されたため、土坑の規模も含めて推定すると、座位による埋葬と推定されるが、埋葬方向は不明である。



第26図 E11号墓・出土遺物実測図

出土遺物は、人骨と同じレベルの覆土から陶器盃 1 点（第26図-1）を検出している。ほぼ完形の肥前陶器で、口径6.2cm、高台径2.4cm、器高3.9cmを測る。器形は外面高台から体部下半はやや丸みがあり、口縁部下から外反する。高台はケズリ出して、高台内側の削りが浅く、底部の器壁がかなり厚くなっている。高台端部は平らに削っており、部分的に幅が異なる。体部下半は回転ヘラケズリで、口縁部下から内面にかけてはヨコナデを施している。胎土は密で焼成は良好、内面から高台のやや上まで施釉しており、施釉部分の色調は淡青灰色、無施釉部分は灰白色である。前述した盃 3 点から比較すると底部が厚く、口縁部が薄い。

(2) E 12号墓 (第27・28図)

E 12号墓は、E-B群の平坦面のほぼ中央に位置し、東西の主軸 (A-B) はGN-41.5° -Eである。

石組は東西 (A-B) 1.25m、南北 (E-F) 1.02mを測り、やや東西 (A-B) 方向に長い長方形を呈す。石組の外周に10~40cm前後のものを比較的整然と配置し、内側には何も据えておらず、河原石も検出されなかった。

北面 (E側) は、30~40cm大の石材を直線面を揃えて整然と配置し、一部の石材の上に一回り小さい石材を置いている。南面 (F側) は、10~30cmの石材を、北面 (E側) ほどではないが、直線的に据え、一部の石材上に一回り小さいものを置いている。東面 (A側) は、明確に面を構成する石材と言えないが、10cm大の石を3個を検出している。西面 (B側) は、25~30cm大の石材を直線的に整然と据えており、南面 (F側) とのコーナーの石が樹根によりずれ落ちている。

西面 (B側) 前面 (南西) に20~40cmの石材が2個あるが、石組に石材がずれ落ちたものか、西側配石の位置がずれたものかは判断できない。

またC側に30~50cm大の石材があり、D側には10~20cm大の石材があり、当初は石組の石材が大半失われた墳墓と考えて調査を行ったが、明確に墳墓と認定できる成果が乏しく、火葬墓の可能性もあり得るが、本報告ではE 12号墓と合わせて掲載した。

地下遺構は、石材撤去面後に5~15cmの黒褐色土掘り下げ後、地山面で検出した。長軸 (E-F方向) 1.66m、短軸 (A-B) 1.22m、最深部深さ0.64m、基底面長軸 (E-F方向) 1.28m、基底面短軸 (A-B) 0.77mの土坑を検出することができた。検出面では隅丸不整形で、基底面は隅丸方形を呈している。覆土は概ね黒褐色土で、樹根により攪乱を受けており、堆積状況を観察することはできなかった。

出土遺物は、基底面から土師器2点、覆土中から土師器2点と鉄釘2点を検出している。(第28図)

1は、土師器皿である。土坑基底面の西側 (B側) 中央部で、底から5cmほど浮いた状態で検出した。ほぼ完形で口径11.6cm、底径6.8cm、器高2.6cmを測る。体部は直線的に開く。底部は回転糸切り痕が残り、体部内外面、内面見込み部はヨコナデを施している。胎土は密で、色調は鈍い橙色である。内外面とも二次的に火を受けた痕跡があり、激しく黒変している。

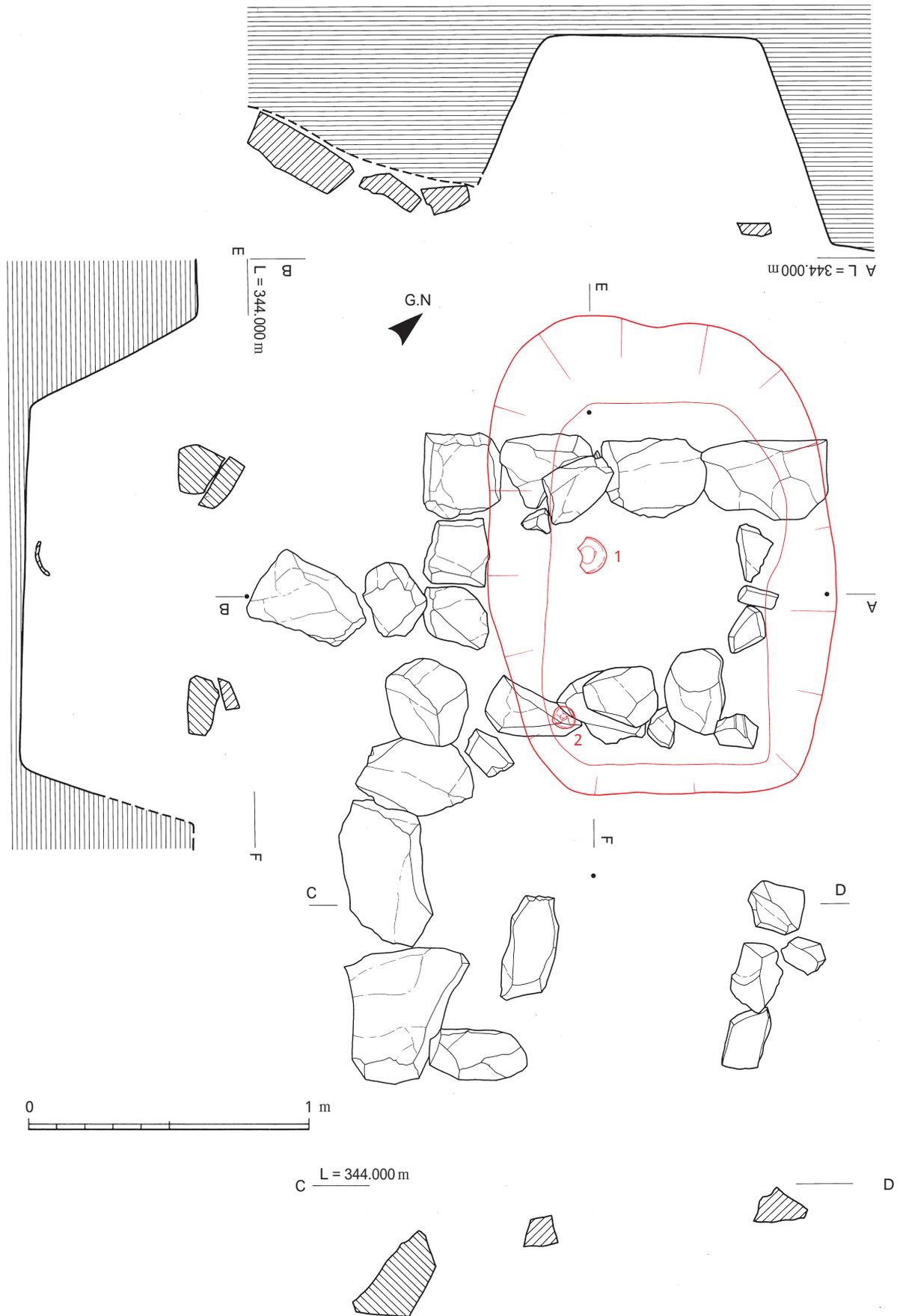
2は、土師器で底部付近しか残存していないため、器形は明確でないが皿と思われる。土坑基底面南隅の底から5cm程浮いた状態で検出した。底径は6.4cmを測り、残存高は1.5cmである。粘土塊水引き成形の可能性が高い。底部は回転糸切り痕が残る。胎土は密で、色調は鈍い橙色を呈し、焼成は良好である。欠損した破面を簡素な研磨で二次的に加工している。(平面図網かけ部)

3は、土師器皿である。覆土上部から検出している。約1/6残存しており、復元口径10.9cm、復元底径6.9cm、器高3.3cmを測る。底部は回転糸切り痕が残り、体部内外面、内面見込み部はヨコナデを施している。胎土は密で、焼成は良好、鈍い橙色を呈す。1より器高がやや高いが、体部の開きは同様に直線的に開く。

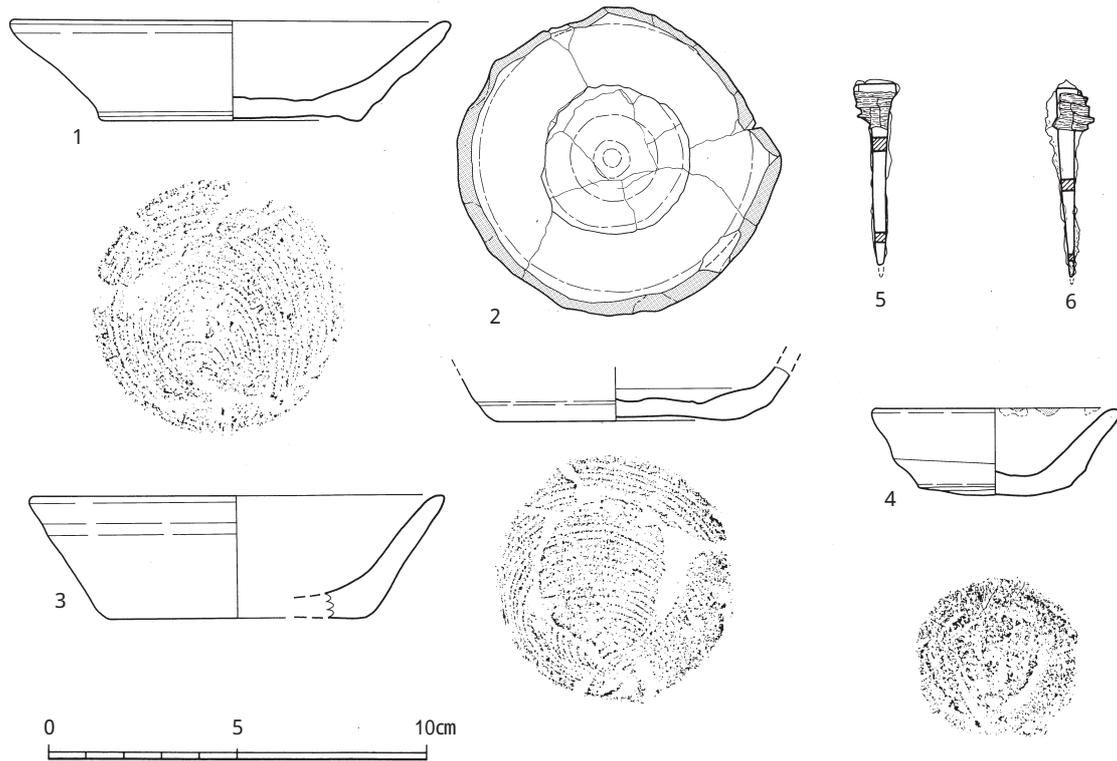
4は、土師器小皿である。覆土上部から検出している。完形品で、口径6.5cm、底径4.1cm、器高は2.3cmを測る。底部はヘラ切り後未調整で、体部外面下位に回転ヘラケズリを施し、体部外面中位から内面まではヨコナデである。見込み部に指圧痕が残る。口縁部の内側の一部に煤が濃く付着し、その外面1/4ほどに薄く付着している。3、4はこの墳墓に直接伴わない遺物と思われる。

5、6は鉄釘である。基底面から約30cm上位の覆土中から検出している。

5は、全長5.4cm、錆を除き、わずかに欠損する先端部を復元した全長は5.2cmである。断面四角形で、



第27図 E12号墓実測図



第28図 E12号墓出土遺物実測図

中央部で 0.6×0.7 cm角である。釘の頭は、素材を 0.5 cmほど片側に曲げて平らにしている。釘の頭の下部には木質が残り、厚さ 1.0 cmを測る。

6は全長 4.9 cm、錆を除き、わずかに欠損する先端部を復元した全長は 5.1 cmである。断面四角形で、中央よりやや上で 0.7 cm角である。釘の頭は、素材を 0.5 cmほど片側に曲げて平らにしている。釘の頭の下部には木質が残り、厚さ 0.8 cmを測る。2本とも、ほぼ同様の規格で、出土レベルから見ると、棺上部に使われていた釘と考えられ、木質の残存から棺の木材の厚さは 1 cm以上はあったと考えられる。

E12号墓は、人骨は検出していないが、地下遺構の規模や、鉄釘の検出から土葬墓で、今回報告する土葬墓で唯一の寝棺と思われる。石組と土坑の位置関係は、土坑の両端がはみ出す形となる。

(3) E13号墓 (第29図)

E13号墓は、E12号墓の南東にあり、背後(北東)は急な上り傾斜となる。東西(C-D)の主軸は、GN- 57.5° -Eである。地上遺構は、石組と西側配石からなる。

石組は東西(C-D) 0.80 m、南北(A-B) 1.05 mを測り、南北(A-B)方向に長い長方形を呈す。

北面(A側)は、中央に長辺 55 cmの石材を直線面を外側に向けて据え、その両側に 30 cm大の石材を置き面の角としており、比較的整然とした配置となっている。東面(D側)は、中央に長辺 45 cmの石材を、直線面を外側に向けて置き、北側は北面の角の石材を共有し、南側(B側)は石材を失っている。同様に南面(B側)も中央に長辺 45 cm大の石材を据え、両側の石材は失われているものと思われる。西面(C側)も石材が失われているが、同様の据え方と推定される。各面の中央に、長辺の長い石材を据え、角に石材を据えて端正な形区画を造り出すという据え方は、E13号墓のみである。内側には $10 \sim 20$ cm大の石材を任意に配置している。

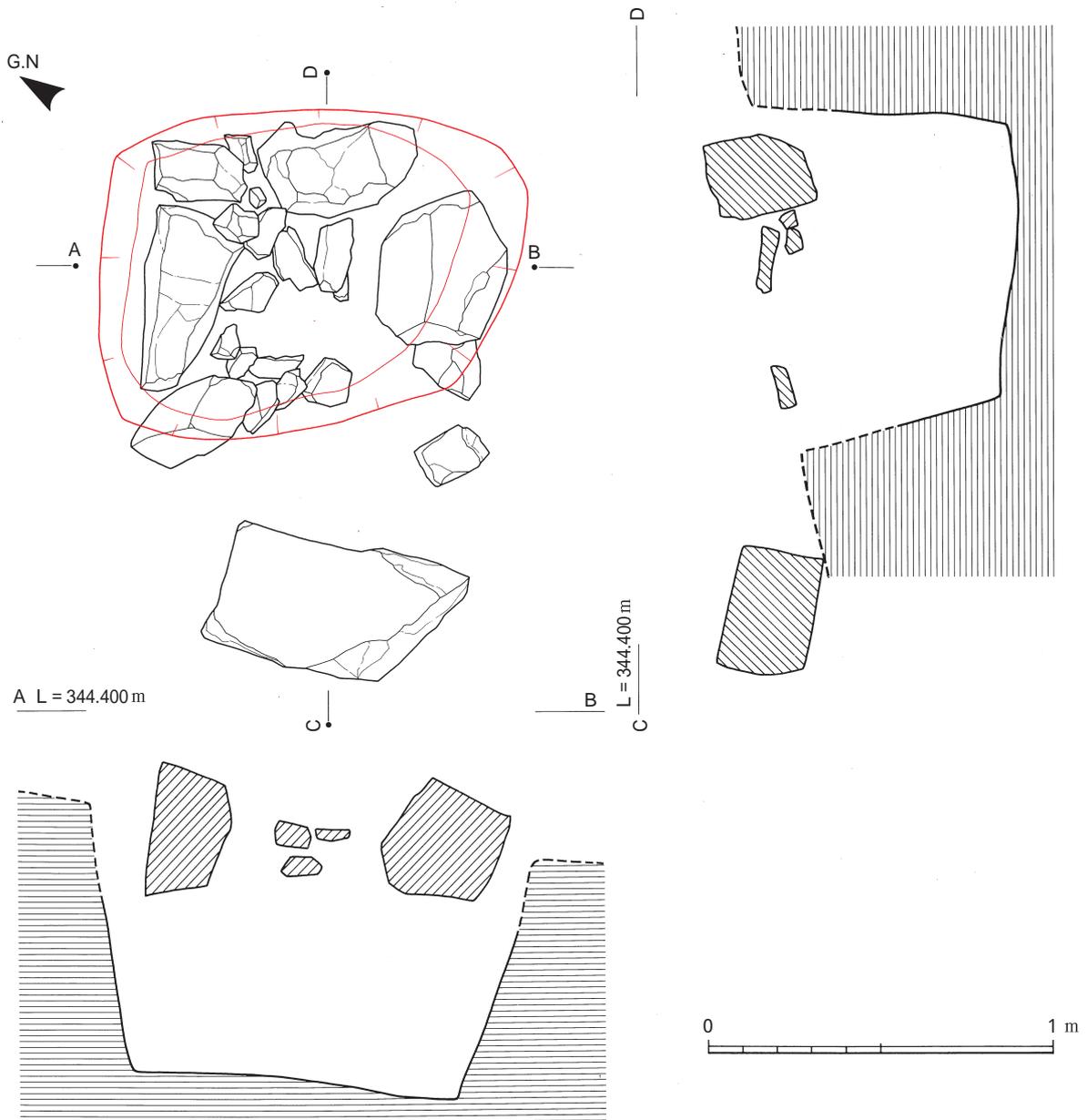
西面（C側）前には、30cmほど離れた位置にA-B方向75cm、C-D方向38cm、最大厚26cmの西側配石が据えられている。

地下遺構は、石材撤去後に約25cm黒褐色土を掘り下げた時点で、地山面で土坑を検出した。規模は、長軸（A-B）1.19m（復元1.29m）、短軸（C-D）0.92m（復元1.10m）、最深部深さ0.49m（復元0.71m）で、やや不整の隅丸方形である。基底面は、長軸（A-B）0.93m、短軸（C-D）0.79mを測り、検出面と同じ形状である。

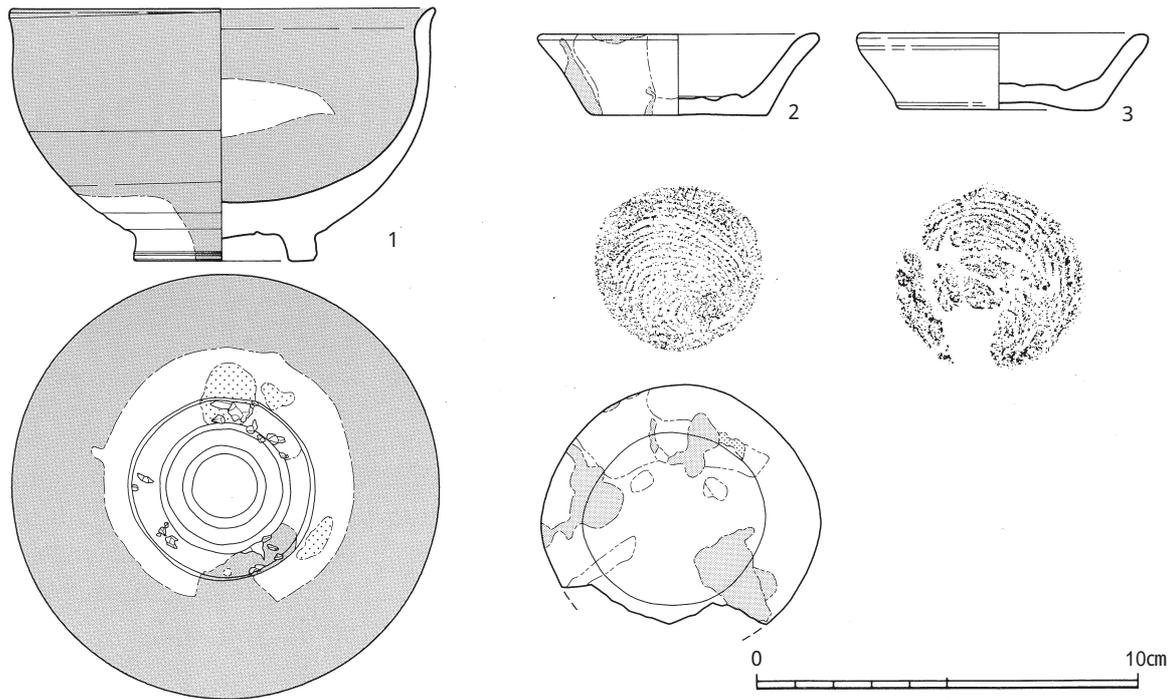
墳墓際にあった樹木の根の影響で、土層観察は不可能で、覆土は黒褐色土であった。土を水洗いした結果、骨片1を検出した。土坑の形状から、埋葬方法は座位による土葬と思われる。

出土遺物は、陶器壺1点、土師器小皿2点を検出している。（第30図）

1は、陶器壺で、覆土下位から、破片で点在した状態で検出している。体部上方の一部の破片が検出できなかった、ほぼ完形品である。口径11.2cm、高台径4.7cm、器高6.7cmを測る。体部外面は丸く内湾して立ち上がり口縁部下でわずかに外反する。内面も同じだが、外面口縁部下のわずかな外反に対応して外反



第29図 E13号墓実測図



第30図 E13号墓出土遺物実測図

する。調整は内面から外面体部上半までヨコナデを施し、外面体部下半は削りだした高台まで、回転ヘラケズリを行っている。高台は断面四角形で、端部を平らにしている。この平坦面には、概ね3カ所に砂が付着している。内面と外面高台のやや上位まで、施釉され暗緑褐色を呈し、一部高台まで流れている。内面には一部無施釉の部分がある。焼成は良好、胎土は密で灰褐色を呈す。肥前産と思われる、時期は17世紀中葉である。

2は土師器小皿で、覆土下位から出土し、約1/5を失っている。口径7.4cm、底径4.7cm、器高2.1cmを測る。鈍い橙色を呈し、焼成は良好で胎土は密である。底部は回転系切り痕があり平坦で、内外面とも丁寧なヨコナデを施し、体部外面は、底部から直線的に開き、中位でごくわずかに外反する。内面体部と見込みの境界には、明瞭な段が見られる。外面の底部から体部にかけて、3カ所に煤が濃く付着しており、内面には全く付着していない。使用方法に一考の余地がある。

3も土師器小皿である。破碎して一部を失うが、ほぼ全体を接合できた。口径7.8cm、底径5.2cm、器高2.0cmを測り、口径と底径が2よりやや大きい。鈍い橙色を呈し、焼成は良好で胎土は密である。底部は回転系切り痕がありほぼ平坦で、内外面とも丁寧なヨコナデを施し、体部外面は、底部から直線的に開く。内面体部と見込みの境界には、明瞭な段が見られる。煤の付着はない。

註(1)「新版 絵巻物による日本常民生活絵引」 澁澤敬三・神奈川県立日本常民生活研究所編 平凡社 1984

(2) 森田 勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』 2, 日本貿易陶磁研究会 1982

(3) 矢島恭介「日本出土銭貨一覧」『日本考古学事典』日本考古学協会編 東京堂出版 1976

(4) 杉山 洋「浄土への祈り 経塚が語る永遠の世界」 雄山閣 1994

(5) 一部については、太宰府市教育委員会保有の赤外線デジタル取込みシステムによる成果である。

(6) 助元興寺文化財研究所藤澤典彦氏作成の法華経データベース (Windows版「桐」) を「マイクロソフトエクセル」を介在させて、Mac版「ファイルメーカープロ」に変換したものを使用した。

第 章 区調査のまとめ

第 1 節 墳墓の調査から

1 埋葬形態上の位置づけ

九州地域における中世の墳墓は、火葬が主流となり、火葬土坑、墳丘墓、石組墓などが群集するようになる。頭地松本 B 遺跡で見られる石組墓は、福岡県内を中心に分布しており、その埋葬形態は火葬である。⁽¹⁾

頭地松本 B 遺跡の石組墓で、火葬墓と思われるものは16基中 5 基で、残りは土坑を有する土葬墓であった。火葬墓と思われる墳墓からは、時期を示す遺物は検出していないが、土葬墓からは17世紀代の遺物を検出しており、墓地内から検出した遺物の時期や九州地域の例から、火葬墓を中世的な様相と捉え、時期の差による埋葬形態の違いと考えた。地上遺構の石組は継続し、埋葬形態は中世まで火葬を採用していたものが、近世になると土葬が採用されるということである。

地上遺構が石組で、地下遺構に土葬用の土坑を設けるという構造は、球磨郡内では、明治・大正年間まで認められ、他地域と比較すれば、地域的な特色として捉えることが可能かもしれない。

2 墓地の変遷について (第 3 表)

調査範囲内を中心に、墓地の変遷について考察してみると次のようになる。

(1) 火葬墓の造営

西群のテラスに 3 基、東群 (E-A 群) に 2 基の火葬墓と思われる石組墓が検出されており、主要なテラスにまず火葬墓が造営されたと思われる。構造的に丁寧なものが初現と考えると、最初に西群先端部に W 3 号墓が造られ、次に W 2 号墓、W 1 号墓が造られたと考えられる。

次に、一段高いテラスの E-A 群のテラスの東奥部に、E 9 号・10 号墓が造られる。石組の構造は簡素化されるが、中心部に五輪塔が据えられる。西群の石組墓の間にある西 1 号～3 号塔も、現位置を保っているとすれば、同じ時期に据えられたのではないかと考えている。

註 (1) によれば、石組墓が矮小化し、五輪塔が出現するのが14世紀中頃とされており、上記の 2 群を見ると同様な傾向を辿ることができるが、現時点で検出している出土遺物の時期から、やや時代を下げ、この墓地に五輪塔が出現するのは15世紀代と考えたい。

(2) 土葬墓の造営

本遺跡で地上遺構に石組を持つ土葬墓が造営されるのは、出土陶磁器から17世紀前半と考えられる。したがって、火葬と思われる石組墓との間に空白期間が存在することになる。墓地全域を調査していないため明確ではないが、16世紀代に墓地の造営が中断され、17世紀になって再び土葬墓が造営されはじめたと考えられ、連続性は認められない。この頃、一部の墳墓の石組上に五輪塔が据えられ、期間を経て五輪塔残欠が、E 9・10 号墓周辺に整理して置かれたものと思われる。

空白期間は、埋葬地としての連続性はないものの、墓地としての認識はされていたものとする。この期間が何に起因するものなのか、明確な答えを用意できない。

第3表 墳墓一覧表

数値の単位 (m)

墳墓名	群	東西主軸	地上遺構			地下遺構			推定時期						
			E-W	N-S	内側	外列	西配	長軸方向	長軸 (底)	短軸 (底)	深さ	埋葬形態	石組とのズレ	陶磁器	炭化物
W1号墓	西	GN-66.5°-E	0.95	0.90	石組と河原石	有	—	—	—	—	火葬?	—	—	—	
W2号墓	西	GN-67°-E	1.10	0.85	石組と河原石	有	—	—	—	—	火葬?	—	—	—	
W3号墓	西	GN-67°-E	2.30	2.50	石組と河原石	有	—	—	—	—	火葬?	—	—	—	
E1号墓	E-A	GN-58.5°-E	1.33	1.25	石材と河原石	無	GN-58.5°-E	1.09 (0.59)	0.74 (0.44)	0.74	土葬 (座棺?)	無	—	17C中葉	
E2号墓	E-A	GN-60°-E	1.30	1.58	石材と河原石	無	GN-83.5°-W	1.22 (0.69)	1.09 (0.54)	0.68	土葬 (座棺?)	やや有	—	—	
E3号墓	E-A	GN-45.5°-E	0.92	1.05	石材と河原石	無	GN-17.5°-E	1.31 (0.77)	1.19 (0.72)	0.85	土葬 (座棺?)	有	—	—	
E4号墓	E-A	GN-55.5°-E	0.63	0.61	石材のみ	無	—	—	—	—	土葬?	—	17C第2四半	—	
E5号墓	E-A	GN-57°-E	1.29	1.51	石材と河原石	無	GN-57°-E	1.37 (0.54)	1.15 (0.51)	0.98	土葬 (座棺?)	無	—	17C第2四半	—
E6号墓	E-A	GN-52°-E	1.15	1.45	石材と河原石	無	GN-66°-E	1.53 (0.85)	1.38 (0.76)	0.91	土葬 (座棺?)	やや有	—	—	
E7号墓	E-A	GN-54°-E	1.47	1.41	石材と河原石	無	GN-58°-W	1.10 (0.55)	1.00 (0.44)	0.8	土葬 (座棺?)	無	—	—	
E8号墓	E-A	GN-66.5°-W	1.00	1.21	石材のみ	無	GN-13°-W	1.10 (0.67)	1.10 (0.48)	0.67	土葬 (座棺?)	やや有	—	17C中葉	
E9号墓	E-A	GN-49°-E	1.30	1.40	石材・地輪	無	—	—	—	—	火葬?	—	—	—	
E10号墓	E-A	GN-49°-E	1.40	1.30	石材・地輪	無	—	—	—	—	火葬?	—	—	—	
E11号墓	E-B	GN-42.5°-E	1.00	1.03	石材のみ	無	GN-15.5°-E	1.00 (0.71)	1.00 (0.49)	1.55	土葬 (座棺?)	無	—	17C第2四半	—
E12号墓	E-B	GN-41.5°-E	1.25	1.02	無	有?	GN-48.5°-W	1.66 (1.28)	1.22 (0.77)	0.64	土葬 (寝棺)	やや有	—	—	
E13号墓	E-B	GN-57.5°-E	0.80	1.05	石材のみ	無	GN-32.5°-W	1.29 (0.93)	1.10 (0.71)	0.71	土葬 (座棺?)	無	—	17C中葉	—

土葬墓の造立順序については、整然としたものから簡素なものへという中世同様の傾向があるのであれば、E1号墓 E4・5・6・12・13号墓 E2・3・7・8・11号墓という順序が想定できるが、地下遺構から出土した遺物の年代や炭化物の科学測定の結果からは、大きな時期差は認められず、また土坑も座棺用に混じって寝棺用のものも1例あり、石組の主軸方向の同一性を含めても、現時点では規格化した流れを見出すことはできない。

いずれにしろ、土葬墓は17世紀代の比較的短い期間に造営されたと考えられる。

(3) 墓地機能の終焉

西群もW1号墓の西側配石周辺から、17世紀末～18世紀初頭の陶器碗が検出されており、少なくとも18世紀初頭までは、墓地として機能していたと考えられ、18世紀代には川辺川東岸の河岸段丘上に、その場所を変えたものと思われる。

東群E-A群テラスの北端から、一字一石経塚が検出されている。造営時期を示す遺物はないが、墓地機能の終焉時に追善供養のために造営された可能性もあると考えている。

埋葬機能としては役割を終えた墓地だが、一部はその後も墓として認識され、現在に至っていると思われる。

3 石組墓調査からの問題点

土坑を有する石組墓の覆土には、石組の石材が全く検出されていない。座棺を用いた構造であれば、当然棺が朽ち果てて陥没する段階で、混入すべきものである。土層観察が不可能であったため、明確な解答は得られないが、その解釈には、次の2案が考えられる。

(1) 棺を埋納して、一定期間後に石組を設置

五木村内の墓制に関する民俗調査報告によると、聞き取り調査で明治年間に、3回忌に墓標を建てたという記録がある。²⁾ これと同様な葬送方法があったとすれば、土坑を掘り、座棺を据え埋納したあと、3回忌あるいは7回忌などの年忌供養の時まで墓標を設けず、土坑が陥没した後に、窪みを埋め込み平らにしてから、地上遺構の石組を設置した可能性が考えられる。土坑の位置と石組の位置が微妙に異なる例があることは、この要因からくる可能性がある。

(2) 土坑上に塚を造り、その周囲と上部に石組を設置

これは、昭和30年代まで球磨郡内で見られた埋葬方法である。³⁾ この方法であれば、陥没しても、土坑内には石材が混入しない可能性が高い。石組の内側が乱れている例もあり、可能性として指摘しておく。

第2節 経塚の調査から

1 経石文字の分析

経石に記された経典の種類を「法華経」と仮定し、判読できた13の文字の掲載される行の数を、法華経の各巻ごとにまとめたものが第4表である。

法華経の全文字数が、題字を含めて69,607文字あり、検出した経石の数が1,930個で、復元した経石の分布範囲から半数が失われていると考えれば、経石の総数は4,000個前後となり、全文字数に及ばない。

第4表 経石一覽表

文字 掲載位置	度		想		生		具		万		言		提		上		於		寧		大		月		行	
	全体	行頭	全体	行頭	全体	行頭	全体	行頭	全体	行頭	全体	行頭	全体	行頭	全体	行頭	全体	行頭	全体	行頭	全体	行頭	全体	行頭	全体	行頭
掲載行数	189	9	19	2	487	19	108	8	241	9	314	19	143	6	228	12	712	62	5	1	555	35	32	3	206	10
第1巻	12	0	0	0	13	1	6	0	21	1	3	0	9	0	17	0	28	0	0	0	37	4	13	1	13	1
第2巻	14	1	0	0	55	2	6	0	12	0	27	3	2	0	12	0	45	5	1	0	27	0	0	0	15	0
第3巻	18	0	0	0	49	2	14	0	4	0	22	1	7	0	18	1	56	8	1	0	57	2	0	0	16	1
第4巻	0	0	0	0	11	0	3	0	2	0	15	0	5	0	6	1	35	3	0	0	30	4	0	0	4	0
第5巻	5	1	0	0	23	1	3	0	1	1	5	1	0	0	9	1	19	0	0	0	23	1	0	0	9	0
第6巻	4	1	0	0	4	0	9	0	11	1	7	1	2	0	6	0	14	5	0	0	16	3	0	0	10	0
第7巻	32	4	5	0	52	1	6	1	39	1	29	4	23	1	19	1	56	5	0	0	63	7	1	0	13	1
第8巻	11	1	1	0	15	0	11	0	3	0	8	0	8	0	9	0	23	1	0	0	18	0	1	0	11	3
第9巻	1	0	0	0	4	0	1	0	6	0	6	0	6	0	6	0	17	1	0	0	3	0	0	0	4	0
第10巻	5	0	0	0	11	0	2	0	4	0	4	2	9	0	5	0	25	5	0	0	10	1	0	0	5	0
第11巻	14	0	0	0	4	1	1	0	14	1	16	0	0	0	11	0	33	2	0	0	37	2	0	0	3	0
第12巻	5	0	0	0	24	2	6	1	0	0	14	1	14	1	6	0	20	1	0	0	17	1	0	0	10	0
第13巻	1	0	0	0	4	1	4	0	5	0	11	0	4	0	5	1	19	2	0	0	6	0	0	0	5	0
第14巻	5	0	5	0	22	1	3	1	2	0	9	1	2	0	12	0	42	2	0	0	27	1	0	0	20	0
第15巻	3	0	0	0	13	1	0	0	20	2	13	1	7	1	9	2	44	5	0	0	36	2	0	0	12	1
第16巻	12	0	4	0	29	1	2	1	7	0	18	0	2	0	3	0	25	0	0	0	13	0	0	0	4	0
第17巻	3	0	1	0	20	2	6	0	16	1	4	0	11	2	15	1	25	1	0	0	10	1	0	0	14	0
第18巻	1	0	1	1	13	1	8	0	5	0	6	0	1	0	1	0	13	0	1	0	5	0	0	0	3	0
第19巻	0	0	0	0	29	0	1	0	2	0	15	2	3	0	18	2	30	2	0	0	23	1	2	0	5	0
第20巻	3	0	0	0	5	0	2	0	8	0	9	0	8	0	6	1	22	4	0	0	15	0	2	0	6	0
第21巻	4	1	0	0	4	0	1	1	5	0	6	0	1	0	5	0	19	3	0	0	7	0	1	0	4	0
第22巻	0	0	0	0	5	0	2	0	2	0	5	0	2	0	1	0	4	0	0	0	6	1	0	0	3	1
第23巻	4	0	0	0	28	1	1	0	12	1	15	1	5	0	9	1	31	2	0	0	20	1	10	2	6	1
第24巻	11	0	2	1	15	0	1	0	18	0	10	0	0	0	6	0	11	0	0	0	10	1	1	0	5	0
第25巻	20	0	0	0	17	0	5	3	4	0	9	1	1	0	0	0	11	1	0	0	14	0	0	0	1	0
第26巻	0	0	0	0	4	0	1	0	3	0	10	0	2	1	1	0	7	1	2	1	0	0	0	0	2	0
第27巻	1	0	0	0	8	1	1	0	9	0	14	0	5	0	8	0	23	3	0	0	16	0	1	0	4	1
第28巻	0	0	0	0	6	0	2	0	6	0	4	0	4	0	5	0	15	0	0	0	9	2	0	0	8	0

このことから、特定の巻だけを記したのではと仮定し、各巻ごとに調べたが、13文字全てが記されている巻は見られなかった。しかし、「寧」と判読した経石は右下が消えており、読み違えている可能性もある。仮に「寧」を除外すれば、第7巻の「化城喻品第七」と、第8巻の「五百弟子受記品第八」が該当することになる。第7巻の行数は370行で、文字数は約6,290字を数え、第8巻の行数は130行で、文字数は約2,210字を数える。

また、別の視点で、各行の頭の文字だけを記して、全部を記したことにしていると仮定して見てみると、13文字全てがいずれかの巻の行頭に位置している。法華経の行数は4,089行あり、復元した経石の個数に近い数字となる。経石数が4,000個前後の類例を統計処理して同様の傾向があれば、行頭文字のみの写経は、可能性としては最も高いと考えている。

註 (1) 狭川真一「中世の火葬 - 九州地域」『シンポジウム中世の火葬 - その展開と地域性 - 資料集』

東国歴史考古学研究所・帝京大学山梨文化財研究所 1995

(2) 米原正晃「むら人の一生 葬制」『五木の民俗』五木村民俗調査団編 五木村役場 1993

(3) 木嶋康弘氏（本課職員）からの助言による。木嶋氏の祖父の墓がこの形態であったということである。

報告書抄録

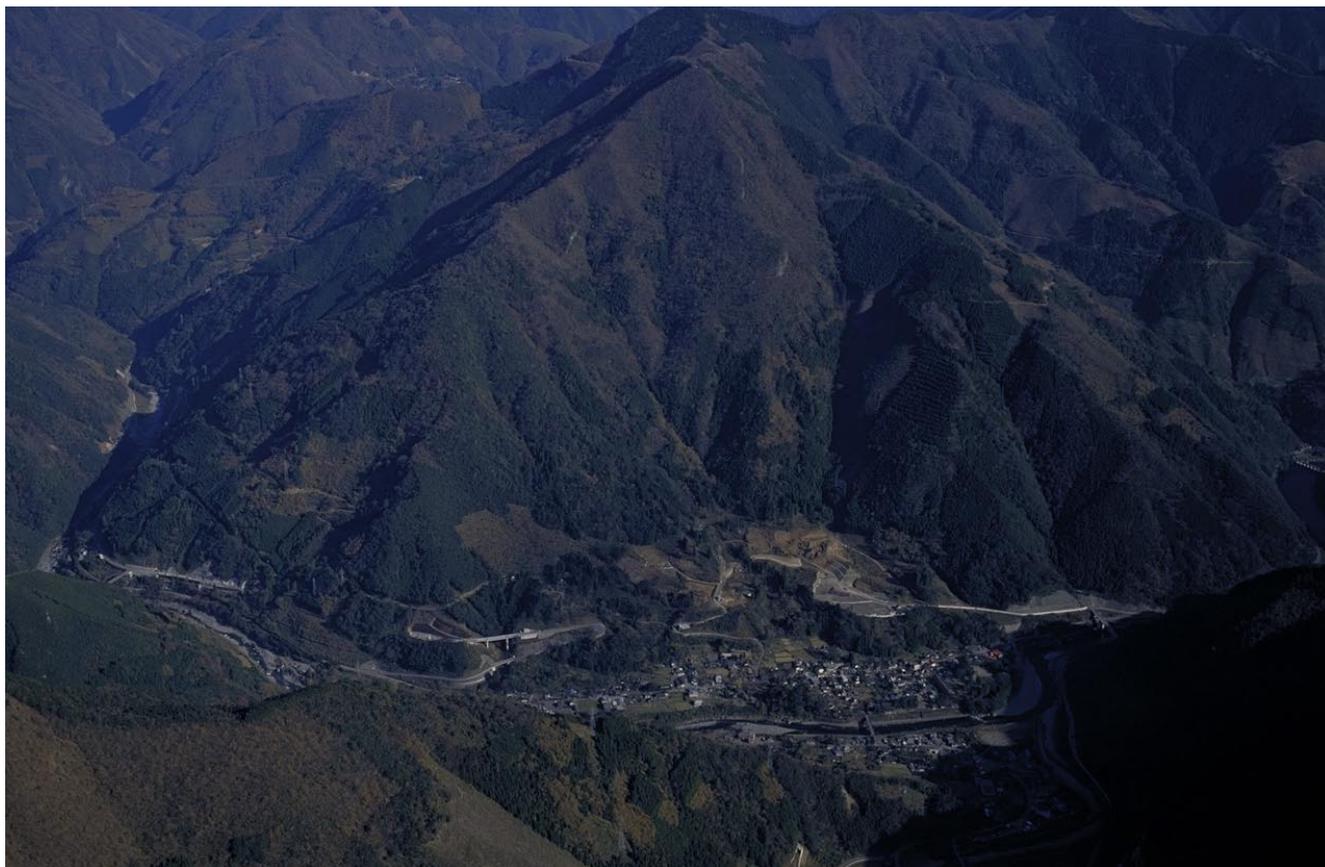
ふりがな	とうぢまつもと
書名	頭地松本B遺跡(1)
副書名	建設省川辺川ダム建設事業に伴う文化財の調査
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ号	第165集
編著者名	山城敏昭
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号
発行年月日	西暦1997年3月31日

所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積
頭地松本B	球磨郡五木村甲字松本	435112	未定	32度 23分 52秒	130度 49分 47秒	199510 —199606	4500m ²

主な時代	種別	主な遺構	主な遺物	特記事項
室町時代	墳墓	石組墓(火葬?)	五輪塔 磁器 土師器	3基で1群、外周列石、西側に配石あり 地下遺構なし 3基の間に五輪塔が据えられている
江戸時代	墳墓	石組墓(土葬)	五輪塔 陶磁器 土師器	地下に座棺用と寝棺用と思われる土坑あり 総数10基
	経塚	一字一石経塚	経石	墨書判読13個、法華経か?

写真図版

図版1 遺跡遠景



1 西から



2 東から

図版2 区 (北西から)



図版3 区 (西から)



図版4 西群



1 真上から



2 東から

図版5 西群



1 東から



2 西2・3号塔 (西から)

図版6 西群



1 W1号墓 (東から)



2 W2号墓 (東から)

図版 7



1 W3号墓 (東から)



2 E9・10号墓検出状況 (西から)

図版8 東群 (E 9・10号墓)



1 検出状況 (南から)



2 西から

図版9 東群 (E 1号墓)



1 地上遺構 (東から)



2 地下遺構 (北から)

図版10 東群 (E 2号墓)



1 地上遺構 (東から)



2 地下遺構 (西から)

図版11 東群 (E 3号墓)



1 地上遺構 (東から)



2 地下遺構 (北から)

図版12 東群 (E 5号墓)



1 地上遺構 (南から)



2 地下遺構 (北から)

図版13 東群 (E 6号墓)



1 地上遺構 (南から)



2 地下遺構 (東から)

図版14 東群 (E 7号墓)



1 地上遺構 (南から)



2 地下遺構 (北から)

図版15 東群 (E 8号墓)



1 地上遺構 (南から)



2 地下遺構 (北から)

図版16 東群



1 E 4号墓 (南から)



2 1号経塚 (南から)

図版17 東群 (E11号墓)



1 地上遺構 (西から)



2 地下遺構 (東から)

図版18 東群 (E 12号墓)

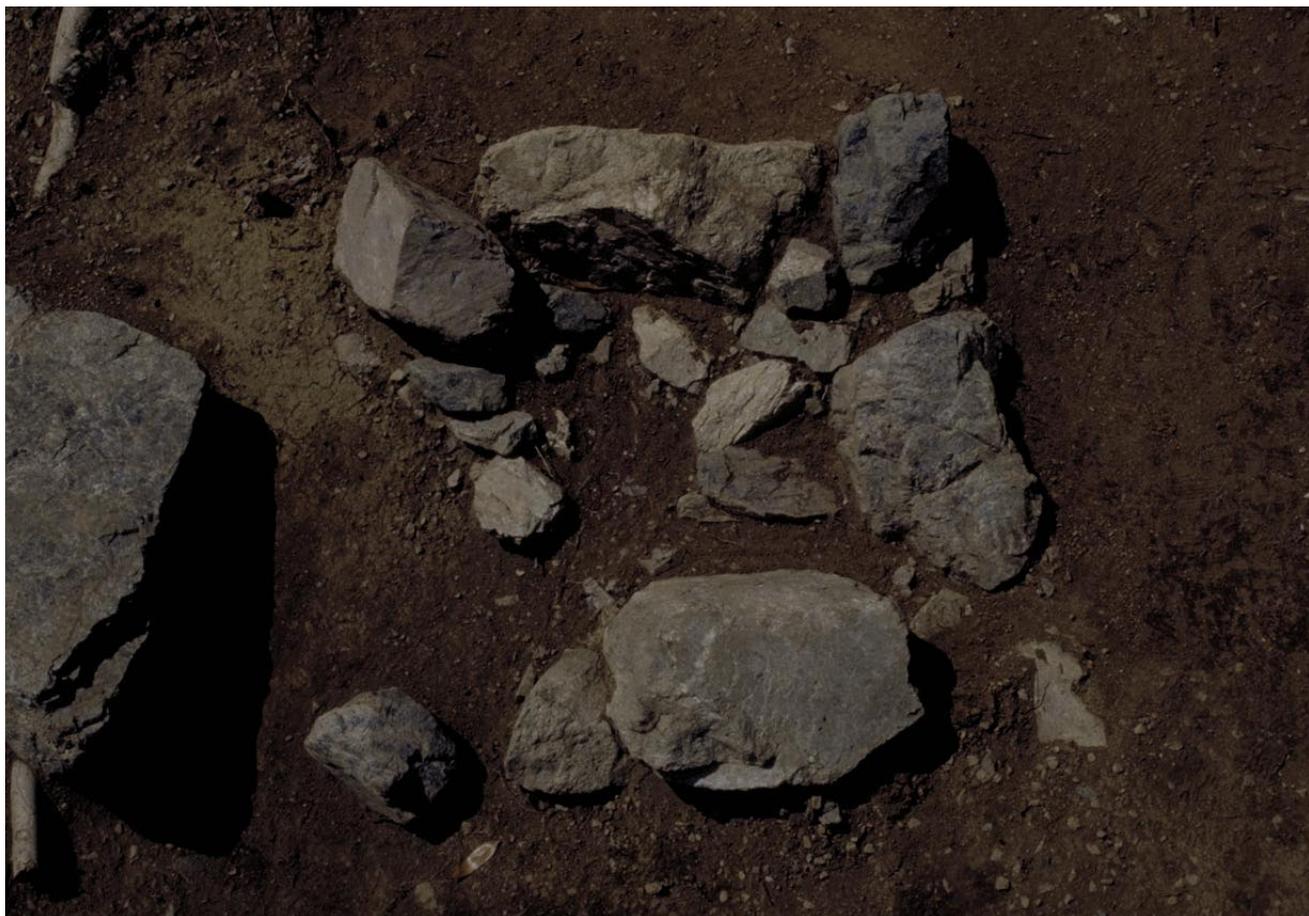


1 地上遺構 (北から)



2 地下遺構 (北から)

図版19 東群 (E13号墓)

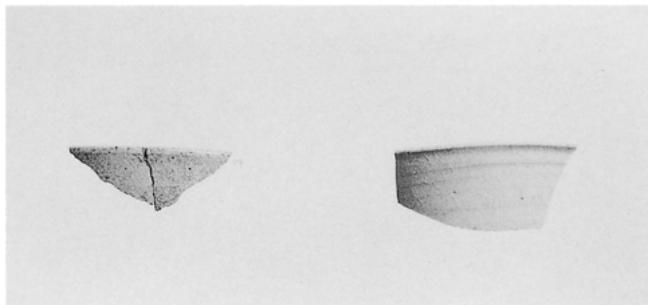


1 地上遺構 (南から)



2 地下遺構 (北から)

図版20 西群出土遺物 (1 ~ 5 約 $\frac{1}{2}$ 6 約 $\frac{1}{4}$)



1 第10図 - 1・2



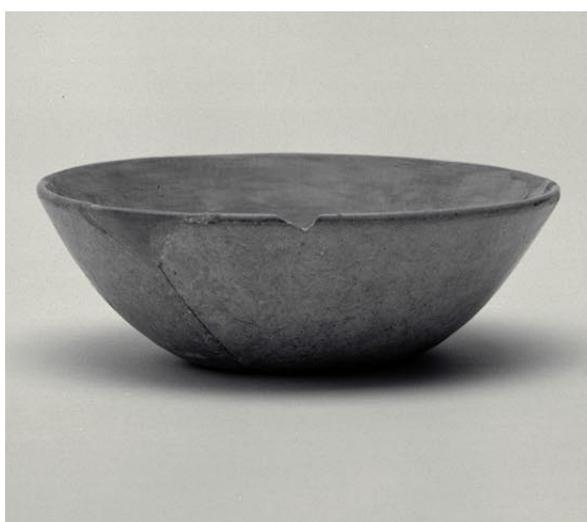
2 第10図 - 3



3 第10図 - 4 内面見込み



5 第10図 - 3



4 第10図 - 4



6 第6図 - 4

図版21 東群出土遺物 (約 $\frac{1}{2}$)



1 第26図 - 1 (E 11)



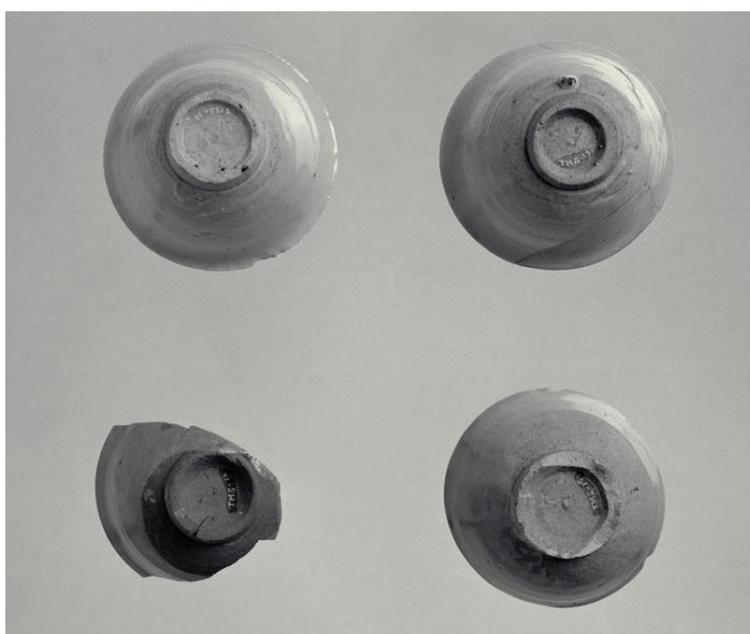
2 第15図 - 1 (E 4)



3 第16図 - 1 (E 5)

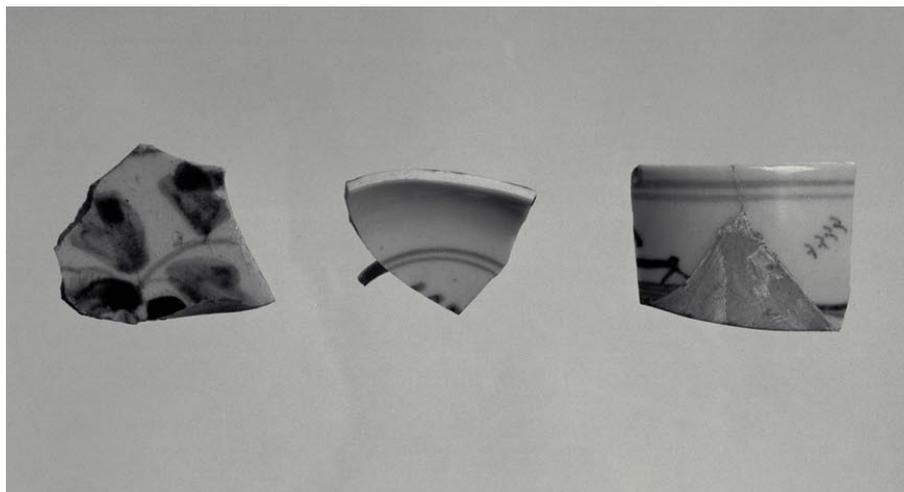


4 第16図 - 2 (E 5)



5 1 ~ 4の底部

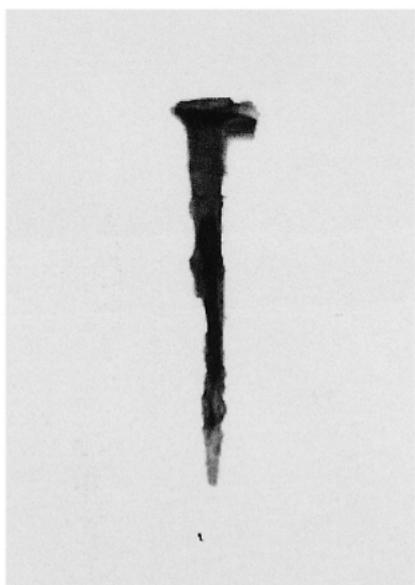
図版22 染付・鉄釘 (E 12)



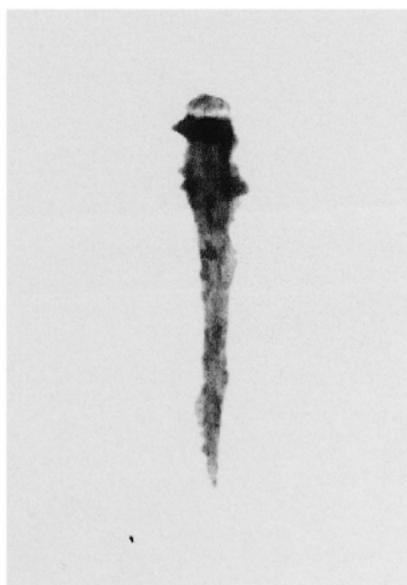
1 第23図 - 1 - 3 (約)



2 第23図 - 2 (約)



3 第28図 - 5 X線写真



4 第28図 - 6 X線写真

図版23 E 12号墓出土遺物 (1 ~ 5は約 $\frac{1}{2}$ 6 ~ 7は $\frac{1}{1}$)



1 第28図 - 1



3 第28図 - 2



2 第28図 - 3



4 第28図 - 2



5 第28図 - 4



6 第28図 - 5



7 第28図 - 6

図版24 E 13号墓出土遺物 (約 $\frac{1}{2}$)



1 第30図 - 1



3 第30図 - 2



2 第30図 - 1



4 第30図 - 2



5 第30図 - 3

図版25 東群五輪塔 (1 ~ 4 は約 $\frac{1}{4}$ 5 は $\frac{1}{5}$)



1 第21図 - 1



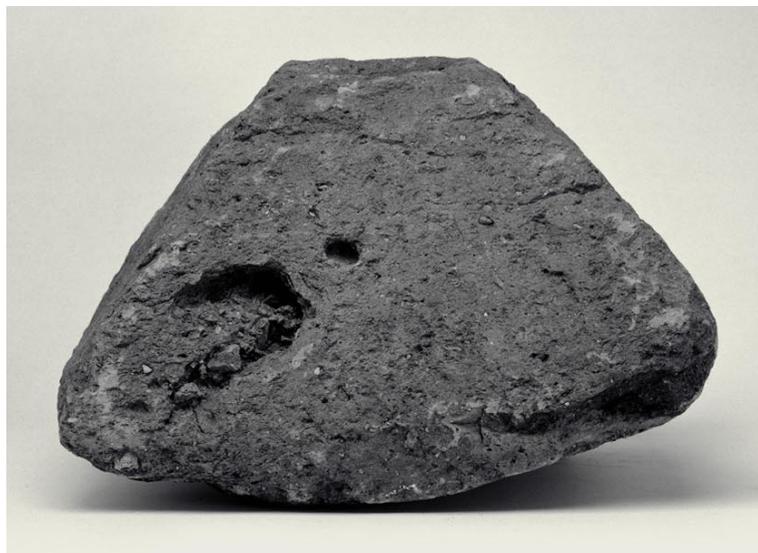
2 第21図 - 3



3 第21図 - 2



4 第21図 - 4

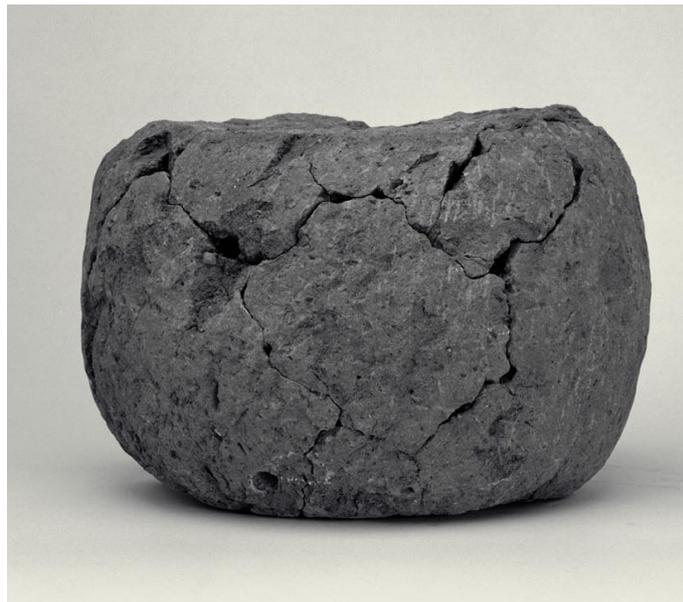


5 第21図 - 6

図版26 東群五輪塔 (1は約 $\frac{1}{4}$ 2~4は $\frac{1}{5}$)



1 第21図 - 5



2 第21図 - 7



3 第21図 - 9



4 第21図 - 8

図版27 1号経塚経石 (約1/1)



「万」

「月」



「度」

「生」



「大」

「行」

図版28 1号経塚経石 (約1/1)



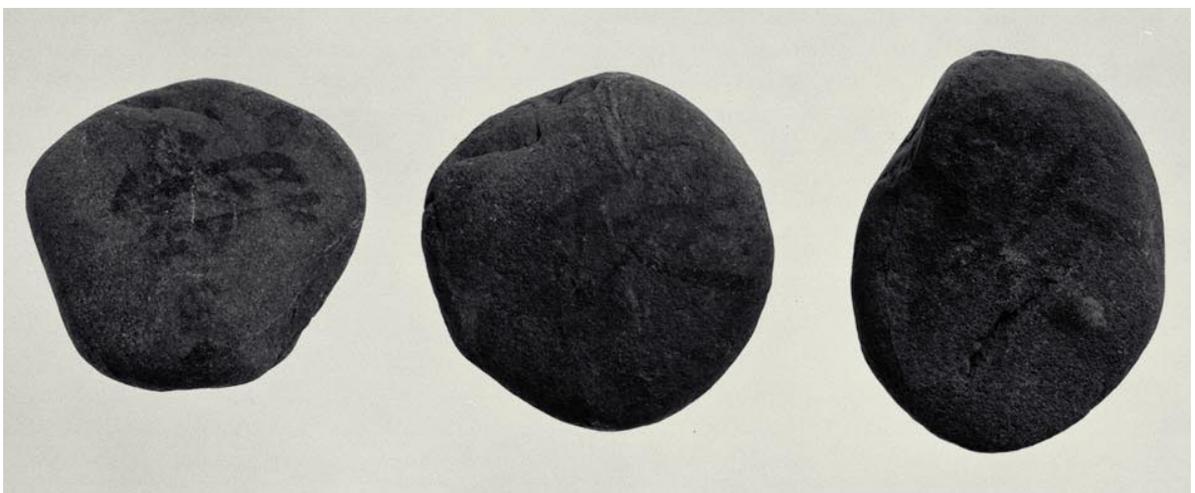
「上」

「具」



「言」

「想」



「寧」

「提」

「於」

熊本県文化財調査報告 第165集

頭地松本 B 遺跡(1)

平成9年3月31日

編集 熊本県教育委員会
発行

印刷 白木印刷株式会社
〒862 熊本市九品寺5丁目9-35

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第165集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：頭地松本 B 遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL： <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2015 年 12 月 8 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会

URL： <http://www.kumamoto-bunho.jp/>